吾妻山

一切經山の噴火

山がある、之を吾妻山と云ふは總稱で、實は家形山・一切經山・吾妻富士・東吾妻・中吾妻・西吾妻等の數峰に分れてある、其の主峰たる一切經山は明治二十六年五月に噴火したので有名である、毎年七八月の候には參拜の爲め登山するもの多く、其の南方の土湯峠は猪苗代から福島に至るの經路である。

經土湯峠至于福島　羊腸山道越層嶺　糧乏兵疲落日天　宮認山村行不盡　一叢杉檜帶炊煙　大島圭介

猪苗代湖

翁島

一夜にして大湖となる

猪苗代湖（本邦有數の大湖で周廻凡十六里俗稱四里四方といひ、湖の西北隅に翁島と稱する方二町餘の一小島がある、傳說によれば、大同元年磐梯山の巽隅月輪・更科の二莊一夜にして陷沒し水を湛へたるもの即ち此の湖であるといはれて居る、此の說の當否は暫く論外とするも四圍の地形を見ると成程と肯かるゝものがないでもない、蓋し磐梯山を大同

猪苗代湖の成因

戸之口

日橋川

の破裂とすれば、火山破裂の際其噴出物の堆積によつて流水を遮斷し、遂に大潴澤をなすこと必ずしも珍らしからぬことで、日光の中禪寺湖・信濃の諏訪湖の如きも此の種類である、現に彼の磐梯陰の檜原湖の如きは去る廿一年の大噴火によつて出來た一種の裾野湖であるのを見てもわかる、この猪苗代湖が摺鉢形をなして、其の東面の山脈は一帶に火山灰を以て掩はれて往々火山岩層と互層して居るのを見ると、何うしても磐梯山初め布引などの諸山から熔岩及び火山灰を迸出して漸次堆積し、遂に河流を遮つて茲に一大湖水を現出したものであらう、之に朝する四山の溪流中大なるものを磐梯の陰より來る長瀨川（又、醉川）とひ、其の委口は西北の一隅にあつて戸之口といひ、其の水流は日橋川（下流を阿賀川と稱す。）一に會津川といひ會津一の大河である、此の湖は實に海拔千七百尺の高さを有する一大高原湖であつて、水產には鮒魚形ち大にして味最も美で近江の產に

川桁孵卵場

絶好の避暑地

讓らず、近時附近の川桁に於て鮭鱒等の孵卵場を設け盛に養魚に從事して居るから、何れ近くは一の國產として名を得ることであらうが、沼尻山の硫黄製造所から流れて來る惡水の爲に非常に妨害になつて居るとのことである、さて此の湖水は安積・北會津・耶麻の三郡を浸し、其の水清澄鏡の如く、遠山を銜み長江を呑み、浩々蕩々として朝暉夕陰氣象萬千の概があつて、猪苗代の勝狀正に此の一湖にありと言ふも過言でない、若し夫れ盛夏三伏の候と雖も凉風松韻に和して炎熱の何者たるかを知らざらしむるに至ては、眞に絶好の避暑地として世に紹介する所である、地は多少僻遠の嫌はあるが、汽車東京上野を發して只一回郡山驛の乘換を濟ませば、足土を踏まずして湖岸欲するまゝに何處の停車場にても下車することが出來る、新潟まで開通の曉は少くとも必ず一回は直通列車の運轉あるべければ此の不便は益〻除き去ることが出來るであらう、勿論

有栖川宮御別邸

湖岸は健康地帶

安積疏水と其の餘澤

是は近き將來の夢とした所で、此の沿岸の風光を愛でさせ給ひて有栖川宮殿下は率先して御別邸を長濱と云ふ所に御建築になつて、爾來每夏御差閊なき限りは此の地に御避暑遊ばさるゝことに承つて居る、沿岸數里の間長汀曲浦繪も及ばざるの風致に至つては、多く其の匹を見ずと言はれて居る、眼界の廓然として大きい所は榛名湖や蘆湖の遙に及ぶ所でない、湖水の到るところ情澄なると、沿岸の變化に富んで居るとは到底琵琶湖の比でないとは殆んど定論である、況やマラリアなどの風土病は藥にしたくも發見することが出來ぬ、而して官曾て此の湖水を疏導し、東方安積郡の荒野を開拓したる工事に至つては實に曠代の偉業と稱せられてゐる、會津には直接關係ないけれども、猪苗代湖の餘澤によることであるから、宜しく之を不朽に傳ふべきである。

明治六年郡山の富民阿部茂兵衛氏に諭して大槻村を開かしめ、功成りて忽ち一大聚落を爲したもの卽ち今の桑野村である、此の歳車駕東巡の事あつて、六月十六日畏くも蹕を桑野に駐められ、開墾の績を褒し給はれたが、此の時開墾の事を督したる當時の典事中條政恒氏、車駕に先つこと數日大久保内務卿此の地を過ぐるを見、備さに卿に陳ずるに遠く猪苗代湖水を引き、以て各方士族の產なき者を移し遍く全郡の原野を開き、且つ古田の旱害を除くの策を献じた、卿立所に此の言を容れ夫〻企つる所があつたが、不幸にして凶刃に斃れて中止し、次で故伊藤公の内務卿となるやその志をつぎて上請疏湖の業を興した、時に明治十二年十月である、工程を分ちて二期となし、第一期は先づ湖の西岸日橋川の流出口たる戸ノ口布藤兩堰の水底を浚疏し、架するに石橋を以てし之を十六橋となし、長二百尺、十六竇を疏ち十六閘を列ね、開閣自在以て二堰從前

の水量を保たしめ、而して一方湖東の山潟灣に於て左右に石埭を築き、中に溝渠を疏ち、東に去る三百間石造水門橋を設け、又東に去る千七百四十間沼上嶺に至り嶺腹竇を疏つこと三百廿五間、竇口閘を設け鐵鎖を以て門扇を約し轆轤を以て開閉し、溝水直下百四十五尺の瀑布となり、斯くして下流灌漑の及ぶ所實に五千三百餘町、昔時榛莽荆棘の野變じて稻粱桑麻の沃野となり、今や疏水の餘澤各種の工業に及び、安積全郡舊時の面目を一新するに至ると云はれてある、而して近時東京の資本家によつて猪苗代水力電氣株式會社なるもの企圖せられ、湖水の電力を以て西の方遙に東京に送電するの計劃であるとのことである、是より益〻猪苗代湖は多事ならんとして居る。

小平潟天神　看れども厭かず盡も成り難き沿岸を濱傳へ長瀨川の湖水に朝する所に到れば、白砂青松の一松原に出るであらう、遠近の諸山

小出宮を小平潟に改む

蒼波に浮動し眺望甚だ佳、小平潟天神社鎮座の地である、蒼翠社頭に掩映して湖山の景頗る麗しい所である、もと此の地を小出潟と云つたのだが、昔何人にや攝州平潟から菅神の畫像を携へ來り、又別に公の木像を刻して祠を建てゝ之を祭り、神像の出處に因りて小平潟と稱するに至つたと傳へられてある、毎年六月廿五日の例祭には天神詣でと稱し遠近の老若群をなして參拜し、此の地方稀なる賑般を呈するのである、有名なる連歌師猪苗代兼栽は此の地の產である。

會湖八景　山崎　闇齋

〔觀音夜雨〕江雨夜來湯　乾坤窓此生　薛老灑湘宿　短詩今尙鳴　曾是觀音客　欲和情轉情
〔吾妻秋月〕吾妻山頭風　暮雲斷復接　怒吐一輪光　入湖天地白　遙憶洞庭秋　何人鼓素瑟
〔平沙落雁〕秋風蘆葉低　秋水涵天平　鴻雁不忘信　來資金曲汀　行々行字列　點々點書明
〔江天暮雪〕朔風吹面寒　斜日沒山巒　漁父漂湖中　樵夫印隘路　翁島影婆娑　忽爲跳躍去
〔山市晴嵐〕快舞磐梯嵐　午天人競出　景光映幃轎　秀色分黃綠　神化誰其尸　推參尋匹逐
〔遠浦歸帆〕環浦波清風　歸帆揭落照　無心船即歌　逸興有曲調　悠々篠山天　英氣展吟眺

〔漁村夕照〕淡々晚村煙　微風吹楊柳　立盡殘照前　漁艇橫浦口　啼鴉閃々歸　遊人亦希有
〔烟寺晚鐘〕靜聞烟寺鐘　聲々傳雲巒　彥明悟天機　持國迷晚路　照破今古情　月光上林樹

三十三年の噴火

沼尻山

沼ノ平

日本硫黃株式會社

沼尻山

安達郡の安達太郎山（又、二本松とも稱す）の一支峰で其の西背に於ける活火山である、西方に磐梯山を望み、北方吾妻の諸山に連り、舊噴火口を沼ノ平と稱し、やゝ廣き平地で摺鉢狀を成して居る、此の邊硫黃多く產し、四近此の氣に蒸されて全く草木が生えぬ、昔は往々ブス即ち硫化水素瓦斯に中りて斃るゝことがあるといつて恐ろしき處にして居つたものだ、明治三十三年七月此の沼ノ平が破裂して火口附近の降灰六尺乃至二十尺に及び、舊火口の中部に更に新爆裂口を生じ、硫黃製煉所は爲めに粉碎せらるゝに至つたことがある、其の後ち更に資本金百萬圓の日本硫黃株式會社設立せられ、明治四十年の營業開始で年々隆盛に赴き、現在は職員四十五人、使用人九百人、昨四十三年度の產出額八千六百噸（凡そ貳拾

中之澤温泉

六萬四）の多きに及んで居る、沼尻山を西方に下ること凡一里中之澤温泉（猪苗代町からは東北四里計り）があつて、沼尻山の西方に下るところ巖下の二つの穴から堀抜井の如く湧き出る熱湯を引いて温泉にしてゐる硫黄泉で、近來は各地方から入浴者が來集して年々盛になつて行く、旅館には西村屋・白木屋・花見屋などがあつて不便を感じない、湯花を製して飲用藥として販賣してゐるが、胃病に特効あるといふことである。

母成峠

母成峠　又一に石筵峠とも稱し、安達郡に通ずる險要の地で、天正十七年の役・戊辰の役共に會津方では深く其の險を恃んで餘り力を用ゐなかつた所から、偶〻敵の乘ずるところとなつて、各方面の會津口の内で最も早く破れた所である、當年暗啞叱咤の址を弔つて、志士の靈魂を慰むるも亦よからうではないか。

磨上原

磨上原　猪苗代町の西方一里半磐梯山の裾野磨上新田にあり、今鐵道

土田驛

磨上原の戰闘

●土田●驛（はばた）の北東十丁計に當る、廣濶なる空閑の地で五十軒原・妙法原・長蜂原・七森原・六郎原等の諸地に接し、古記に四方十二里と見えて居る、何さま廣い原で昔から放鷹狩場の地としてあつた、現今は大抵陸軍省の用地になつて、仙臺の砲兵第二聯隊はわざ〳〵實彈射擊の爲めに此の地に出張して、見る〳〵砲煙彈雨の修羅場となすことがある、のみならず若松の歩兵第六十五聯隊も時々出兵して練習する所となつて居る、斯の如く演習地として今は唯一種の修辭的に劍戟相摩し砲彈雨下するなどゝ人をして空世辭を言はしむるに止まるが、一たび三百餘年の昔を回顧すれば悲愴慨慨やる瀨なき亡國の大悲劇が演ぜられたのである、時は天正十七年夏六月獨眼龍伊達政宗、猪苗代盛國の兩應によりて大擧して兵を會津に出し、先づ猪苗代城を收め進んで黑川城（今の若松）を攻めんとした、時に黑川城主であつた蘆名義廣大に驚き兵を率ゐて磨上原に出て、社稷の存亡

三忠士

三忠碑

此の一戰に在りとて縱橫奮擊攻めつ追はれつ戰つたが、天乎命乎最後の突擊其の効を奏せず、大いに敗れて義廣身を以て黑川に遁れ、賴朝以來の名門たる蘆名氏も衰れや玆に滅亡の運命に陷つたのである、此の役金上盛備佐瀨種常其の子常雄の三士奮戰最もつとめて前後之に討死した、此の三士微かりせば義廣殆んど危かつたと傳へられてある、敵ながら政宗も深く其の忠を賞じ、手厚く之を葬つたといふことである、後ち松平氏に至り、一夫の役を免じて其の墓を掃ひて荒廢せざらしめ、又此の地に三士の爲めに碑を建てゝ三忠碑といひ、魂魄の歸する所なきを慰め、且つ後人の龜鑑として永く之を表彰せしめた、其の碑の文字は實に顏眞卿の字を集めて刻したもので、筆端奕々として躍動するの概がある、あゝ忠烈無双の三士の碑を刻するに同じく漢土忠義の士の字を以てす、洵に其のところを得たりといふべしである、若し夫れ秋風蕭殺として飛鳥下らず挺獸群を亡ふの時、枝を曳いて此の古戰場を弔ふものならば、日光塞くして草短く、月色苦て霜白く、鬼哭愁々傷心慘目、又これに加ふるものがないであらう、文は少し長けれども、是非共之を傳へなければならぬ、因に記す、今鐵道大寺驛近傍に、三士各自の墓がある。

三忠孰謂、金上盛備佐瀨種常常雄、所云疾風知勁草、板蕩識誠臣、若三士是也、猪苗代盛國以邑叛、納伊達政宗也、蘆名義廣自將討之、天正十七年六月五日戰于磨上原、師敗績、出走常陸、初龜王夭無嗣、國相富田平田等議與政宗和、請其弟某爲後、盛備與沼澤出雲等不可曰、近年彼之與我交際如何、而今欲主其弟、不如迎佐竹義重第二子義廣、既而國相與傅大繩讃岐刎石駿河爭權亂將作、盛備慰諭而止、政宗乘此釁、所以有是役也、及戰富田將監爲先鋒、乘風擊之盛國走、片倉景綱亦敗、獲太郎丸掃部、俄而風反、伊達成實白石宗實又詭攻觀者、觀者走、後軍隨而亂

矣、義廣帥麾下、進當政宗、會叛者燒日橋而絶歸路、是以我師大潰、種常常雄死之、盛備慷慨曰、我國之大臣不與社稷俱存亡、何面目立于天下哉、遂赴敵而死、是日徵此三士、義廣殆不免、盛備才兼文武、元老宿將、國人賴之、死之日知與不知莫不流涕、政宗亦曰、盛備叙爵遠江守、不可弗禮厚葬之、種常稱大和、常雄平八郎時年十六、一家殉難、我公讀史至此、歎息每高三士節、今茲七月過其墳、賦國雅弔之、三墳異所、今建石於此、併表之、公親篆額、命臣泰紀其事、噫今死而有知三士、豈不感戴德於地下哉、抑亦足以興起士氣矣、謹換銘以公國雅、度幾河制仁都容記孔左巴遠芝累德夷府浮流古登於茂斐以都盧不留通介、

嘉永三年庚戌十二月　　高津泰撰　山内晉集唐顏眞卿書

惠日寺址

大寺驛を去る數丁の地にあつて昔は非常に盛大なものであつた、此の大寺と云ふ名稱も、磐梯山の靈場たる惠日寺のある所から大寺鄕と稱へられ、本町・新町の二區に分れて藩政の時は本町を大寺、新町を本寺と稱へられたのである、されば實は此の惠日寺は、小字で云へば本寺村にあるのだ、眞言宗に屬して、緣起によると大同元年の大地變で一夜にして猪苗代の大湖が出來るといふ大騷ぎで、人心不安の念に驅られ穩かならぬ所から、當時の官司藤原富士麿朝臣友則の奏請によつて、翌二年弘法大師が勅令（平城天皇）を奉じて來り、巡回敎化宜しくあつて一寺を建て磐梯山惠日寺と云ひ、自刻の丈六の藥師像を安置して變災の鎭護とした

尾寺

と傳へられてある、緣起に磐梯山一に病惱山と云ひ、魔魅が住んで常に祟をなしておつたから空海法を修して妖を磐梯の南麓烏帽子嶽に攘つたとあるのは、卽ち此の事を指すのである、此時奔るところの大蛇の尾此の地に當れるので尾寺と云ふと見えておるが、是は正しく惠日寺の結構壯大であるところから遂に大寺と稱するに至つたのであらう、此の時朝廷官

惠日寺の勢力

租を削つて寺供に充てらるゝに及んで繁盛の基をなし、弘仁元年空海寺を僧德一に附するに及んで寺門益繁榮し、子院三千八百坊、寺僧三百人、僧侶の數は數千人に達して數里の間堂塔軒を並べ、會津四郡の地大方はその寺領になつて凡て十八萬石程もあつたと傳へられてある、平家物語に壽永元年九月越後の城四郎長茂四萬餘の兵を率ゐて木曾義仲の追討に出でて信州横田河原に戰つた時、惠日寺の衆徒乘丹坊會津四郡の兵を以て之に從ひ討死したこと見えてあるが、是れによつて其の會津に勢力を

梁丹坊

蒲原郡會津に歸す

惠日寺の衰因

逞しうしておつたことがわかる、長茂其の忠死を賞し、越後蒲原郡小川莊七十五ヶ村を惠日寺に寄進し、寺產益饒かになつた、蒲原郡の地が永く會津領であつたのは職として是の理由である、而して源氏の世となつて佐原義連の會津に封ぜらるゝや、此の寺が平家方であつたので多く寺領を召し放され、それから漸々衰ふるに至つたが、享祿の頃は猶盛であつたらしい、天正中伊達政宗の亂に、金堂のみを殘して其の他は悉皆兵火に罹り又昔の面影がなくなつたが、古來の靈跡なるに因り伊達氏並に蒲生氏降つては保科氏も夫〳〵寺領を與へて維持せしむる所があつた、明治維新に至つては、

天長二年淳和帝所賜

承保年間白河帝所賜

寺門益荒廢し貴重の寶物什器多く散逸して今は原野の中に僅かに殘れる遺跡が當年全盛の有樣を淋しげに物語るのみてある、平城・嵯峨・淳和・白河の四朝から賜つた銅印四顆は有名なもので、集古十種にも出てゐる、

惠日寺銅印

金堂の側には二世德一・三世金耀並に乘丹坊の墳墓があつて、又本寺村の西北に如藏尼の墓がある、尼は平將門の女で父の誅せられた後ち、世を遁れて此の地に來り、庵を結んで一生を終つたと傳へられてある。

德一、金耀、乘丹坊墓

如藏尼墓

日橋川　猪苗代湖の排水路にして其の潰走の口を戸之口といひ、屈曲して西に向ひ、其の橋は俗に十六橋又鏡橋と稱して有名である、十六橋と云ふは昔征梁十六斷あつたから名附けたものだが、天明六年の修造以來長四十八間、二十三斷の石橋になつて、明治十二年の安積疏水の大工事に伴ひ、十六間を列して形狀眼鏡を列ねた如くであるから此の名を附けたものである、左岸に故有栖川宮熾仁親王殿下御手植松がある、威

日橋川（會津川）

戸之口十六橋

容儼然故殿下の御遺德を語るものゝ如くである、此の川は又一に會津川とも云うて、會津を東西に貫流すること十八里、大小の衆水悉く之に合して下流越後に至り海に朝するのである、木曾山都村（耶麻郡）で南會津から來る只見川を合せてから專ら阿賀川（又は揚川）と稱へられる、此の川は會津平野の中央を貫流する大動脈であるから、舟運の便を開かんとして昔から屢〻つとめたことがあるけれども奈何せん岩代・越後の間山嶽重疊する所、急流激湍多く孰れも失敗に歸した、先づ古くは元和四年蒲生忠郷の時越後津川から舟を通はさうとして、京師の角倉寶重庵が來てやつたが甘く行かなんだ、降つて享保年中に京都から岡田道幽と云ふ人が來て、資を拋つて試みたが再び功を奏しなかつた、之が甘く成功したら、交通史・經濟史の上にも面白い事實を發見することが出來るのであつたらうと思はれる。

日橋川の疏鑿工事

若松地方

會津平野

會津平野はもと湖水なり

鐵路日橋川を越ゆれば丘陵漸く開けて所謂會津平野に出づ、此の平野は主として日橋川・大川の流域で地味肥沃人煙頗る盛である、周圍に山岳を繞らし摺鉢狀をなし、地學上には之を盆地と云ふのである、往昔阿賀川が西の一方を切り拔いて流れなかつた以前は、四周の山から流れ來る水が悉く此處に集まつて一大湖水をなして居つたこと恰も東隣の猪苗代湖の如くで、猪湖にして乾涸せば現在の會津盆地の如くなるだらうとの說である、さて此の盆地に入つて第一の停車場を廣田と云ひ、それより數分にして會津の首都若松市に達するのである、道順はそうであるが遊覽者は宜しく若松に旅裝を解いて、それを中心として四方の名所古蹟の研究にかゝるのが便利であることは云ふまでもない。

帽子洋傘鞄靴

和洋小間物

文房具一式

其他卸小賣

若松市融通寺町

石堂小間物店

!!! 見よ……治博雄大なる中央新聞!!!

◉中央新聞は、政治の機微と政界の事情とを最も敏活に報道し時俗に阿らず評論す

◉中央新聞は、經濟と商況の記事は最も敏確にして公正なる實業界の指針と稱せらる

朝刊（八頁）
夕刊

中央新聞

◉中央新聞は、犀利艶麗の錦と稱せらる小說講談に滿たされ趣味横溢せる社會記事

◉中央新聞は、愛讀者を有するが故廣告力偉大なり各種の階級を通じて最も多くの

!!! 見よ……報道機敏なる中央新聞!!!

發行所
東京市京橋區山町城
中央新聞社 合資會社
（振替二〇〇一番）

定價 新聞代
各夕刊 一錢
同朝刊 五錢
金壹圓三十錢
同半年 壹圓九十錢
三月 六十錢
前月 三十錢
共 壹圓五錢
郵送料 一錢
方ヶ月 一錢
年 一錢
ヶ月 十錢

廣告料
中央五號活字十八字詰一回一行六十錢◎場所指定一行に付十錢增、雜報欄一行壹圓廿錢

電話
編輯局 長橋 四五五 番二四五
新川 四五五 番三四五
廣告 新橋 五五 四六 番四九
商況 川橋 四五 番〇四五
專 番一四五

▼時代の要求に適切なる優良圖書を出版す

營業要目

●小中學校用教科圖書
●各種辭書類
●地圖及掛圖類
●英文書翻刻
●參考用圖書
●內外出版圖書取次

機敏迅速に內外の▼新刊圖書を供給す

東京市神田區本町一丁目
電話 三三一六・七七一九四二
三省堂書店

二六新報の意氣天を衝き、抱負世を蔽ひ、一代の人心を感學指導し盡さずんば休まざるの熱誠と忠度とは世既に定評あり。

正義の急先鋒、人道の擁護者、官僚政治家の一敵國、弱者の味方、平民の伴侶、惱める人の慰安者、迷へる者の指針。

二六報は確固不拔、日夕此の意氣を發揮し、終始此の抱負を斷行す。

苟も活舞臺に立つて活機を制し、活社會に處して活斷を得とするの士は、毎朝必らず此の誠度熱烈なる助言者の言論に聽くことを忘るべからざる也。

◎本紙廣告料
新式活字十八字詰一回一行前金六十錢▲雜報欄內特別廣告一行一回一圓●郵券一割增

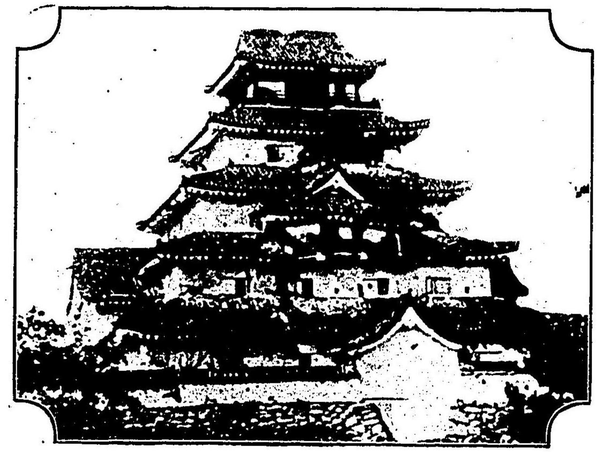
◎本紙定價
一枚一錢五厘一ヶ月三十五錢▲內地本社直送三ヶ月同上二圓十錢▲外國本社直送一ヶ月郵稅共八十七錢郵券代用一割增振替貯金二錢增

▲見本御望の方は一報を乞

東京市神田
發行所 二六新聞社
振替貯金口座 六二七二番
電話 一二六二 二六六〇〇
本局 二六二五〇〇

横濱市港町五丁目
横濱支局
電話 二六〇〇番

大阪市北區東梅田町
大阪支局
電話特第二六〇〇番



鶴ヶ城天守閣（東面）

同　舊天守臺跡

日本歐米十三ヶ國專賣特許

顧問（藥學博士　丹波敬三氏　技師長理學士　肥田密三氏
理學博士　齋藤賢道氏　技師　藥學士　久野浩一氏）

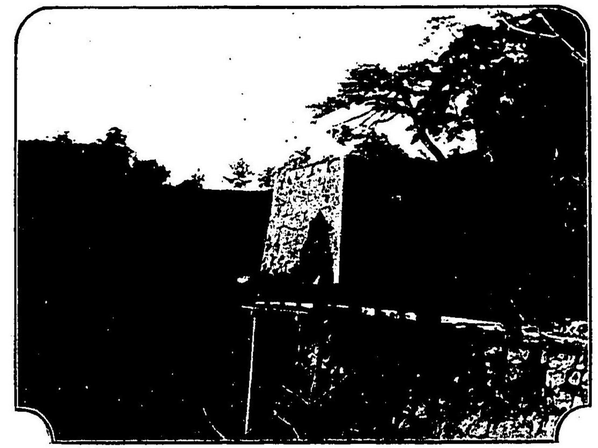
胃腸新藥

ヂゲスチンの特徴は彼のヂアスターゼと異り單に米麥野菜等の澱粉質のみを消化するものに非して克く鳥獸魚介の如き肉類牛乳鷄卵豆乳等の蛋白質（滋養成分）をも併せて完全に消化吸收せしむる最近發明の理想的消化新藥なり▲販賣所は各地有名藥店にあり

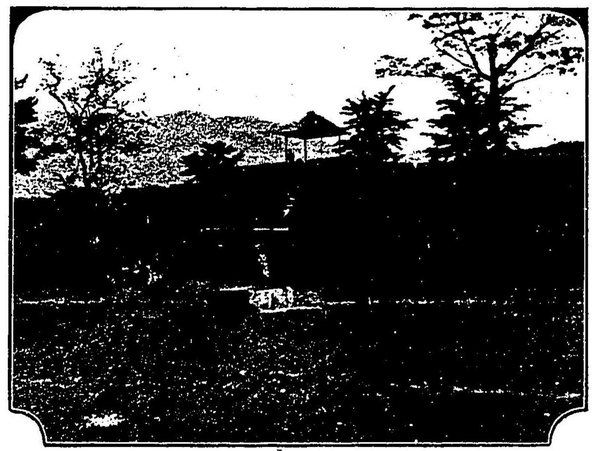
◎尙ほ詳細說明書は御申込次第送呈す

製造發賣元

東京市日本橋區本町三丁目　會合社資　**圓城商鹿**
（振替口座二四一二番　電信略號ヨシエ號）
（電話本局特長一四四三）



鶴ヶ城趾廊下橋



同　月見橋跡

福島縣若松市榮町三丁目

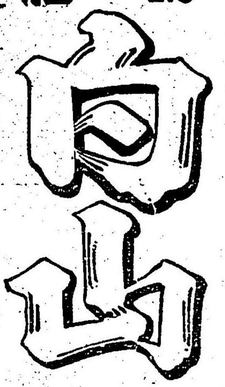
洋服店　笠岡靜治

叶屋號

電話(二一一番)
電信略號(カ)

釀造元

酒鍋



若松市
喜多方町
眞壁彌平

吳服太物

國產絹綿織物

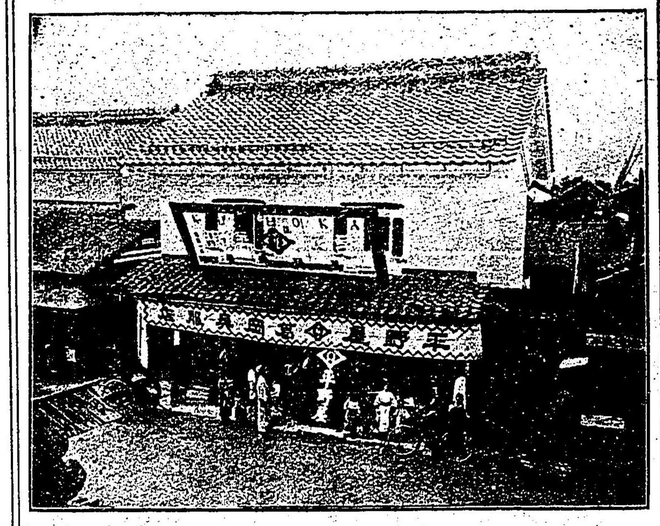
麻　蚊　帳

若松市七日町

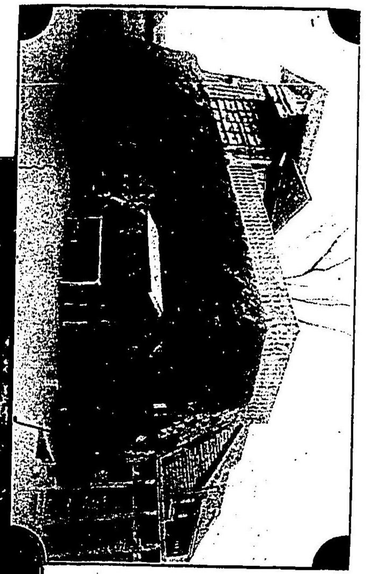
葛岡義吉

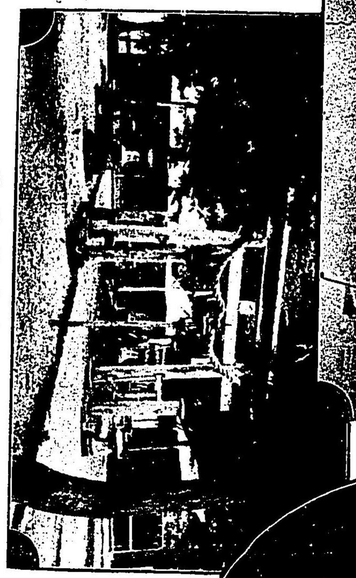
電話百三十一番

振替一六三一九番

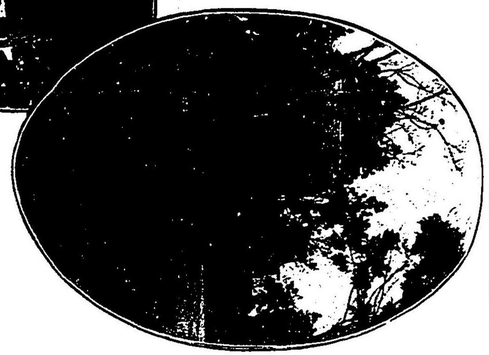


若松鶴城





若松市國幾量



若松鶴城野鳥

院内御廟（會津藩侯累代之墓）

會津中學校

蒲生氏郷墳墓

新聞

◎本紙廣告料本社五號活字十八字詰一行金六十錢指定一面一行金七十錢雜報欄內一行金一圓

（電話）交換臺あり何番にても各部に繋ぐ

京特六〇一
京特六〇二
京特六〇三
京六〇四
京六〇五
京六〇六

振替貯金口座第六六九六〇

東京市京橋區三十間堀一
發行所やまと新聞松下合資會社
發行兼編輯人　星野太郎吉
印刷人　樋口兼一

◎やまと新聞は新聞會に於て天下第一と稱せらるゝ三大特色を有す

◎朝刊の外、尚ほ夕刊と正午版と日々三回宛發行して報道の迅速無比なるは其第一なり

◎社員數の多きと發行部數の多きとに於て新聞界のレコードを被り盛運無双なるは其の第二なり

◎東京市内に於て發賣數の多きと第一位を占むるのみならず津々浦々まで行渡らぬ處なきため勢力信用の強大なると廣告の效果の顯著なるとは其の第三なり

會津特產藁工

各鑛山御用達　莚叺俵袋
若松監獄藁工請負　繩類各種

井筒屋號
白井谷五郎
若松市片柳町四十番地
電話二百五十八番

荒物商店

會津藁の品質は殊に佳
良にして東北に冠たり

和洋

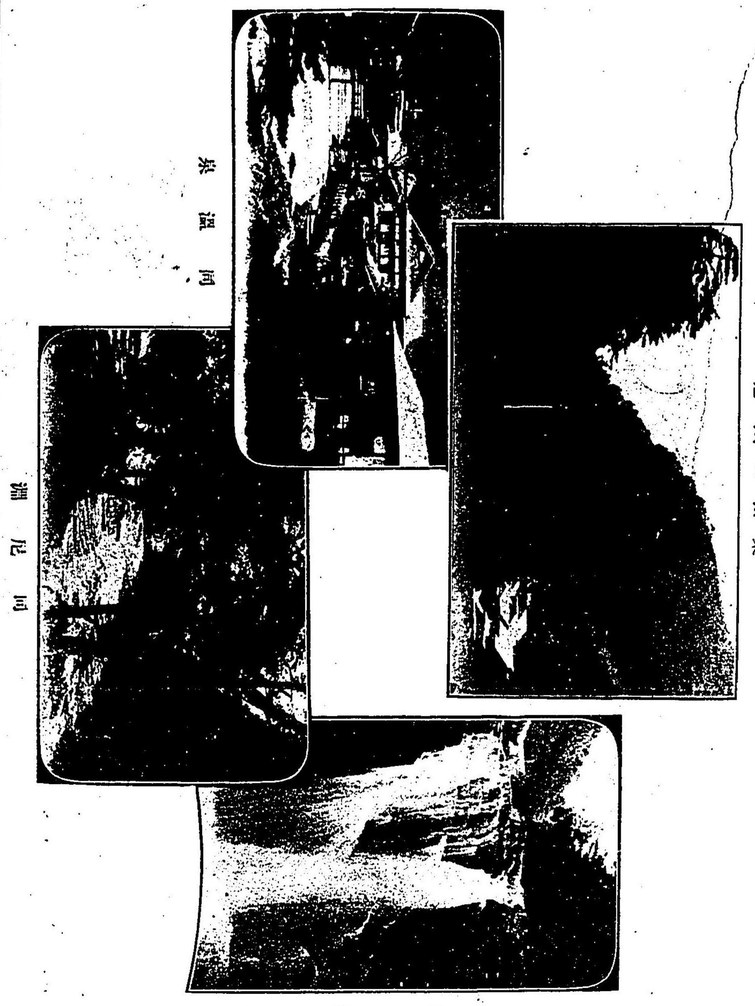
即席
御料理
仕出し

岩代國喜多方町
沈水館丁子屋
電話五十一番

山葉製風琴特約販賣所
三省堂器械標本特約販賣所
美滿津製運動具特約販賣所
諸官衙御用達
國定教科書販賣所

書籍雜誌
和洋紙
文房具

岩代國喜多方町
瀨野屋書店
振替東京一〇七八七番
電話百二番



岩越線喜多方町

高等旅館 笹屋旅館

電話八番

同停車場前 **笹屋旅館支店**

電話架設中

營業品目

内外藥品
高名薬料
繪具染料
高帶材料
繃等品類
電鈴化粧品類
滋養品

目薬高橋コカイン水本舗
福島縣喜多方町
加賀半藥舗
主 高橋半四郎
振替東京一九七五二
電話二十六番

若松白虎隊墳墓（其一）

同上全景

白虎隊墳墓（其二）

諸帳簿製造
和洋紙販賣

若松市下一ノ町
佐島屋商店
五十嵐源平
電話四〇五番
電畧（ヤマ五）

四季折々の
海の幸
滋味豊富
年中一貫

合名会社
大善呉服店
電話三二番
福島市表町方町

修養に最も適したる趣味深き避暑の良友を紹介す

衆議院議員
三土忠造先生著

西史美談

全一冊
ポケット形美本
定價金貳拾錢
郵税金四錢

日本歴史地理學會編纂

再版

戰國時代史論

全一冊 クロース美裝
定價金壹圓 郵税金八錢

籠倉文明史論

日本歴史地理學會編纂

（再版）

全一冊
定價金參拾錢
郵税金拾貳錢

發行所 東京神田 電話本局七二九四七一・六一三三

小田内通敏先生著
超味乃地理

歐羅巴（前編）

ロース美本
定價金八拾五錢
郵税金八錢

松伯岡村愛藏先生譯註

對照註釋ドイル探偵譚

（全一冊）美本洋裝
定價金四拾錢
郵税金四錢

綠陰必讀の書として斯く清新なるもの他にありや

文學博士 南條文雄
文學博士 前田慧雲
共編 師 師

（第八版）

佛教聖典

（全一冊）
上製定價金壹圓廿錢
並製定價金六拾五錢
郵税各金八錢

三省堂書店 振替口座東京 一五九七

過去三十有五年は吾福岡日日新聞の光榮ある歴史也。九州一圓、中國の一半及び臺灣朝鮮滿州は吾福岡日日新聞の信用範圍なり、九州最大般富、最大賑盛の都市を本據として西南の發達を代表するの任に當り、帝國の活動的趨勢の次第に南漸し西漸せんとする氣運と潮流を作興し指導する者は實に吾福岡日日新聞にして、其勢力の偉大なるは夙に定評の存する所也。

年中無休　毎號拾頁　輪轉機三臺

福岡日日新聞

本社　福岡市須崎土手町五番地

振替　東京第一三九九番　大阪第三九九五番　貯金　福岡第二〇番

電話　廣告部　六百五十三番　販賣部　百七十七番　編輯部　六百三番　同上　二百七十二番　同門司支局　二百五十番

下ノ關支局　百三十二番　小倉支局　五十六番　久留米支局　三百四十番　佐賀支局　三百三十六番　熊本支局　二十八番　大阪支局　東三二七二番

福岡日日新聞社

若松の開市

黒川を若松と改稱す

若松　鐵路岩越線の起點郡山驛より約三時間で達する所で、人口三萬二千餘、南に湯川を帶び、西に大川を控へ、東は一帶に丘陵起伏し、西と北とに開けて所謂會津の沃野を展開して居る、會津戰爭で有名な鶴ヶ城は市街の南にあつてその北に市の大部分が横はつて居る、然し河原町・材木町を中心とせる市の西南隅の一部は遙かに城の西方に横つて居る、市街の舊觀は明治戊辰の兵燹によつて悉く灰燼と化したから、最早再び見ることが出來ぬのは實に曠世の遺憾である、古へは蘆名氏の居を定めて黒川館を置いた以來の舊地であるから開市は可なり古いものと云はねばならぬ、其の後ち蒲生氏郷の時に大に城郭を修築して市街を若松と改稱し、上杉・加藤の諸氏を經て保科家（後ち松平氏に復す）となり、寛永二十年の入部以來實に東北の雄藩として、天下に重きをなしたのである、文文久・慶應の間には、城主容保公國家多難の秋に當り朝幕に參して勤勞當時に比す

近代の慘事

若松城址

若松城を毀つ

るものがなかつた、然し丁卯・戊辰の世變大勢一ぴ去り忽ち賊名を被り、薩長諸藩の攻むる所となり、孤城落日の哀れなる樣は實に近代の一大慘事である、其の委曲は既に述べた所であるから凡て略することゝする、亂後士民離散し當時强勢の府城も焚蕩毀壞最も甚だしかつたことは、今猶古老の記臆に新たなる所である、當時新縣令澤簡德專ら士民の撫卹安寧につとめ四千餘戸を復し、漸く治化を一新したと云ふことである。

若松城址　本名は鶴ヶ城、天下の堅城として名聲四方に轟ろいた若松城も、一ぴ彈丸硝雨に浴しては廢城の跡僅かに其の面影のみを存してあつたが、明治九年に至り官之を取壞してから全く舊觀を失ひ、心なき藤葛徒らに長く門を鎖して城壘に攀延し、老松古杉亭々として廢墟に其の影を浮べ、菱歌清唱眞に暗涙に咽ばしめ、痛恨悵惘の情轉た人の腸を絶たゝしむるものがある、近年植樹修飾市民の遊覽地となさんとするのは賀すべきことである。

開城の折によめる

明日よりはいつくの人か眺むらんなれし大城に殘る月影　某女

過若松城址

城壘既荒秋草深　圃漆老樹尙森々　當時順逆今休問　獨感三旬死守心　杉聽雨

弔若松城墟有感

砲烟跡絕廿餘年　殘壘頹垣更耐憐　驛客不關往時怨　漫將文筆賦山川　谷隈山

和韻

國亡家破廿餘年　書劍飄零獨自憐　宮裏無人春草亂　殘陽空照舊山川　東海散史

蒲生氏郷の築城

蘆名氏時代の黑川城

若松城が其の初め黑川城と云つた頃は二之丸・三之丸共に漸次本丸の東に續き北と西とは直ちに馬出を附け、南の方に牛沼とて大きな沼のあつたのを濠に象り、東を追手とし西を搦手とし、本丸の內に屋形を營んだものである、天正十八年蒲生氏郷の入城するに及んで、文祿元年の夏から大工事を起し、內外の郭を築き、中央に天守を建て、樓・多門・馬出等悉

く備り堞壁塹濠嚴とし府城の體をなしたのである、又西北の馬出を廣めて出丸とし、芝土居を石垣に改め、空隍に水を湛え、二三の郭の內にあつた小郭を毀ち、內郭の地勢を平坦にしたのは寛永十六年加藤家の改めたもので、次て松平氏に至つたのである、而して其その築城法の全體に亘つて觀察すると、後世軍學者の說く所と符節を合するが如く、繩張は緻密を極め、その形式整然として備つて居るところ、皷に天下の名城たるに背かずと稱せらるゝ所である。

築城法の概觀

本丸

本丸は周圍四百八十間餘天守の左右から東南に廻つて石垣を繞らし、西北の方を帶郭となし、東は高く石垣を積上げ、南は芝土居の上に石垣を築き、城主の屋形初め諸役署この內にあつた、而して本丸の中央に天守があつて、蒲生氏の時に七重であつたのを、寛永年中加藤氏の時に上層の二重を毀つてから五重になつた、その天守臺の築石法は、外觀上甚だ

五重の天守

二之丸

三之丸

四出丸

北出丸

不規則で大小の丸石を交互とりまぜて積み上げたものであつて、類を異にして居るのを以て有名である、二之丸は本丸の東にあつて周三百間餘、三之丸は又其の東に續いて周八百四十間餘、今は步兵第六十五聯隊の練兵場に充てゝある、而して本丸の西帶郭に續いて西出丸といふがあつて周百九十間餘、今は縣立會津中學校の運動場になつて居る、又本丸の北の帶郭に續いて北出丸があつて周百六十間ある、出丸といふは、築城法から云へば甚だ珍らしいもので、大に研究の價値があると云はれて居る、兵器藏・金藏・米藏・的場・鹽硝藏・彈藥藏等皆此等の內にあつた、外郭は府城の四面を擁し、東西（東は天寧寺町口から西は融通寺町口まで）十六町二十間、南北（南は南町口から北は大町口に至る）十一町四十間餘、縱橫に街路を通じ、郭の四方十六門あつて各市店に通じておつた。

市井

市井

若松の動脈となつて最も殷賑な通りは二つある、其の一は停車

場から南に至る大町通てあつて、其の二は市の中央に於て是と十字形に交叉する七日町通（此の通りは、大町との交叉點から西を七日町通り と云ひ、東を一ノ町通と區別するのである）てある、殊に七日町通りは劇場・寄席・料理店などて有名て、一ノ町通りは市役所・郵便局・警察署等の活動機關が存在して前者と異なる分野をなしておるのは又一奇と云ふべきてある、其の外市内の大通りを以て目せらるゝものには、榮町通・中賀町通・融通寺町通等がある、現今の區分を以てすれば、町の數は大凡九十許りある、さて大體若松を右の樣に心得て、最も現代的な諸官衙・工場・會社・商店等を見て歩くことにする。

官公署には榮町に歩兵第六十五聯隊・若松聯隊區司令部・若松區裁判所・北會津郡役所・福島監獄若松分監・若松稅務署・葉煙草專賣局三春出張所等がある、一ノ町通には若松警察署・若松郵便電信局・若松市役所等があり、甲賀町通に憲兵屯所あり、學校・圖書館等は多く榮町に在つて卽ち福島縣立會津中學校・同會津工業學校（漆工科、染織科、窯業科）同會津高等女學校あり、又榮町舊馬場口の市立會津圖書館は明治三十三年皇太子殿下御慶事記念事業として起つたもので、四十二年十二月末の調査によると委托書と共に藏書の數一萬餘冊に達し、閲覽者年を追うて增加するは喜ばしき現象と云はねばならぬ、

銀行

次に銀行・會社は如何せん地方のことて經濟事情も尙ほ幼稚であるから、他の地方に對して遜色あるを免れぬ、會津五郡の金滿家を合せて僅かに一の會津銀行（株式組織、資本金三十萬圓）よりないとは如何にも心細い次第である、されば本店を東京に有する安田銀行支店（會津銀行と共に一ノ町にあり）は其の爪牙を逞しうして若松は勿論會津一圓の金融を左右するの有樣てある、是は若松の向上發展に就てお互大に考慮を要する點ではあるまいか、

會社

會社は會津電力株式會社は榮町にあり市内及び近郊の點燈を主とし餘力を以て諸工場の動力に使用してある、若松製絲合資會社は新横町にあつて設

工場

備整ひ工場内に百三十六釜を据ゑつけ一ヶ年優に百五十梱を製出するの盛況である、工場には榮町の日本鋸工場は十馬力の電力を用ゐて鋸の製作に從事してゐる、事務室・製作所・機械館・倉庫等十三棟を有し市内第一の工場で、販路は北海道を第一とし全國に亘つて更に滿韓の諸地方にも需用がある、材木町の星野鐵工場・大町の山田調帶金網工場・大和町の新城量器工場・榮町の金成燐寸工場なども盛なものである、染織工場には榮町の石堂絹織物工場を以て第一に推さねばならぬ、この絹物專門の工場主は石堂留吉氏（石堂氏は外に融通寺町の本店に於て呉服店を開いてゐる、陳列館の設備もあつて市内第一の呉服店である。）で斜子・八ツ橋・羽二重等の機臺二十を据ゑ付け、其の製品は殆んど京都へ直接販賣してゐる、博勞町の澁井絹織物工場は、石堂氏の委托工場で主に地方向きである、西名子屋町の樋口絽織物工場も亦石堂氏の委托工場である、材木町の原山木綿織工場・阿彌陀町の山田織物工場は其の名の示す如く木綿織を

産物

專門とする、鎧染織工場は鎧常吉氏の經營で會津地方第一の染織業で、其の紺は正藍を用ゐるので信用を博して居る、又當麻町の福西製油工場、材木町の星野製油・榮町の羽賀製絲工場・材木町の阿部精米所・小山電力精米所・大和町の池田精米所・榮町の竹田精米所等はやゝ大なるものである」更に若松三萬餘の市民が依て以て生計を立てゝ居る物産・商業の方面を概觀すると、未だ發展の道は多々あるものと云はねばならぬ、會津は土地豐饒で古來農を以て立つた地方であるから、農産品並に其の親類筋の産物が主となつて居る、米は會津米として有名なもので、野菜は其の味の美なる尾張平野の夫れと比較して多く遜色を見ずと稱せられる程である、然し若松の主要物産としては實に漆器を以て推さねばならぬ、漆器類の景氣の良否は直ちに若松市民の喜憂を招ぐ程の重大なる關係を有するのである。（會津燒と稱して世に稱せらるゝ陶器は、其の實大沼郡本郷の産である、之は本郷の條に於て述べることにする。）

漆器

蒲生氏郷日野椀の製法を傳ふ

寛永年中初めて漆器を江戸に輸出す

漆器　會津は古くから漆樹の多かつた土地で、既に文龜中蘆名盛高の時轆轤挽木地に赤黒等の漆を塗つた盃・椀・木鉢の類を製したといふことである、天正十八年蒲生氏郷の會津に封ぜらるゝに及び、其の郷國近江日野椀の製法を傳へ吉川和泉介を塗師頭として大に漆器業を起し、秀衡椀に模擬したものを造らしめた、然し此の時代から上杉景勝時代の慶長三年頃までは、漆樹の伐採等は所有主の自由で、官の用ある時は、相當の時價で買上ぐる制であつたのを、同四年初めて會津四郡の漆樹を調査して十九萬八千六百二十四本と定め猥りに伐ることを許さず、目通し四尺回りの漆樹一本から木の實一升五合づゝ上納せしめ、同六年に至り其の役木から年貢蠟二十一匁づゝと改め、寛永四年加藤嘉明の封ぜらるゝや益〻奬勵保護の方針で、當時海東五兵衛の如きは製品を江戸に輸出したと傳へられてある、又役漆として一樹の高さ一丈から漆液一勺づゝを

松平氏の奬勵

田中正玄蒔繪の法を傳ふ

上納せしむるに至つた、而して同十六年の調査には此の役木二十萬三千本餘、同二十年には二十六萬千二百本餘の多きに達して居るのを見ても、奬勵の事實を認むることが出來るのである、同年正之公の入部せられてから、一層産業の奬勵策を執られ山田右膳と云ふ人を漆器奉行とし、又澁地頭・堅地頭等を置いて漆業の監督に任じ、降つて承應三年の調査には漆樹の數九十萬四千、正德元年には百五十八萬五千、寛保二年には百八十萬九千本餘の多きに至つて、實に全國屈指の産地として名聲を海内に博するに至つたのである、享保中技術益〻進み各種の色塗を始めたが、當時の國老田中三郎兵衛正玄、京師から蒔繪師木村藤藏を聘して蒔繪の法を傳習せしむるに及んで製造額著しく增加し、降つて弘化の頃になつて長崎の商人によつて清國及び和蘭に輸出するに至つた、これが抑〻會津塗の外國に輸出せられた始めといふことである、斯くして漸次隆盛に

維新の大頓挫

赴いたのである、幾何もなく明治戊辰の戰亂となつて、四民離散し大頓挫を來たしたが、其の後ち高瀨・鈴木・菊地など云ふ當業者大に之を憂ひて挽回策を講じ、明治十年前後には產額十萬圓に達し更に幾多の變遷を經て今日に至つては製造戶數殆んど四千戶、年額四十萬圓に達するの隆盛を見るに至つたのである、漆器商店の主なるものは白木屋（七日町、陳列場の設けあり）・鈴木屋（大町ノ町一）の二店を最とし丸角屋（大町堅町）新城漆器店（主として木盃製造で、外に酒醡度量衡の製造なし大和町にあり）鈴木漆器店（大町）等之につぎ、此の外甚だ多し。

蠟燭

蠟燭

蠟燭　漆器業に伴つて蠟燭の製造せらるゝは當然のことである、會津蠟と云へば古來有名なもので、藩公から將軍家始め諸侯への贈物には殆んど必ず此の品名の見えぬことがないと云うてもよい位である、然し今日は電燈・瓦斯燈・ランプなど文明の新燈料に壓せられて使用の範圍が著しく狹少になつたから、最早昔日の觀はないけれども、其の內繪蠟燭と

酒類

云ふものは頗る精製した美麗なもので、世に珍重せられて居る、時勢後れてはあるが其の古風な所に、土產物として頗る適當する場合もある、年額二萬圓。

酒類　若松市內最も產額の大なるもので、會津が米穀の產地である丈けに自然盛になつたものである、享保年間家老田中氏藩主の命を受け御酒藏と稱する酒造倉庫を建て、攝州灘地方から杜氏（とうじ）を招ぎて清酒を釀し、藩內の需用を充たすと共に盛に關東地方に輸出したのが、清酒釀造並に輸出の初めだと云はれてある、爾後研究改良を重ね、近年は特に盛になつて燒酎・味淋を加へて一萬六千石、之を金にして五十五萬圓の巨額に上つて居る、主なる商店は山口儀平（博勞町）・河野善九郎（材木町）・相田八四郎（大町）・新城猪之吉（大和町）・星野三郎治・星野嘉右衞門（材木町）等である。

其の外若松の特產として見るべきものは、人參・鍋・煙管（きせる）・飴（中六日町長谷川商店、俗に五郎兵衞

旅行者の適當な土産物

飴と稱す）の類である、味噌・醤油の食料品類から、銅器・鑄造物・各種織物等に至るまで何一つとして出來ぬものはないと云うてもよい、此の點から見ても會津の中心たるを失はぬのである、されは遊覽者の土産として恰好なものは、先づ漆器・絹綿織物類・飴・蠟燭・柿類・乾薇・勝栗・胡桃などである、而して若松の特産ではないが、本郷の陶器（後ちに詳しく記す）と鹽川町特産の九重と稱するコーヒー代用の菓子も珍重せられてゐる。

若松市物産略表（明治四十二年度若松市勢一班に據る）

種類	産額	價額
酒	一五、四五八石	五四九、七八四圓
漆器		四〇五、六〇〇
絹織物	七、七八〇端	四七、七〇〇
綿織物	二一〇、四〇二端	一九六、二三〇
寸燐	三六〇、〇〇〇斤	六、六六〇
生絲	、八二〇貫	一二、九九六圓
繭	、四四〇貫	一八、七九五
味噌	二二〇、〇〇〇貫	五五、〇〇〇
醤油	五、四〇〇石	七五、六〇〇
油類	二、〇〇〇石	三五、〇〇〇
煙管		三五、〇〇〇
鑄造物		六五、五〇〇
蠟燭	一二、〇〇〇貫	二〇、四〇〇
鋸及刄物		四七、七一八

旅館

旅館　旅行者の最も氣にかゝるのは旅館であるが、若松は土地柄丈けに概して質朴着實の風あるは喜ぶべきとである、旅館としては榮町の清水屋（樓閣）最も有名で待遇懇切且つ設備もよく縣下第一の高等旅館と稱せられてゐる、其の外七日町の清水屋（皆山樓）・桝屋・美濃屋・關東屋・大町の笹屋なども中流旅館で、學生向きには甲賀町の湊屋などがよからう、序に割

烹店の主なるものは榮町の清龜樓・清風樓・高野屋、七日町の万壽亭・富貴亭、西洋料理には榮町の西澤が第一である。

社寺

市井の大要は是れて見終つて活動的物質的の若松は了解した、これから精神的の方面に眼を轉じて、古色蒼然たる時代物に頭を清めるのも一興てある。

蠶養國神社　停車場から東方五丁蠶養町にあつて今は縣社に列して居る、延喜式神名帳にも載つてある古社て、天照大神・稚彦靈命・保食命を祀り、五穀及び蠶桑の神として參詣するもの非常に多い、久しく頽廢に委してあつたが、藩祖正之公其の由緒古き神社であるを以て再建して立派なものにしたのてある。

八角神社　鳥居町にあり、祭神は確てないが崇神天皇の御代に八角の水精天から落ちて來たのて、瑞祥となして祀つたものてあると云はれてある、然し乍らその社田が大沼郡の高田にあつたとと、高田には有名な佐須美神社の鎮座せらるゝことゝを考へて見ると、八角社は本來或は伊佐須美神の分祠かも知れぬ、特に寛文の風土記に伊舍須彌神社とある所などは大に考物てある、或は八角は熊野神の八角水精の說と混じて伊佐須美を八角と轉稱せしめたものてはないかとの說もある、今は鄉社に列してある。

諏訪神社　桂林寺町の南にあつて鄉社に列す、拜殿・本殿・能樂堂等があつて四方眺望頗る佳てあるので自然公園の趣味を帶びてゐる、昔は神職の外に密家の社僧・塔頭などもあつたが、正之公の神社改定の時悉く毀たれて純粹の社となつた、社領は蒲生氏以來百石を附せられてあつて會津の大社たるを失はなんだのてある、社司は諏訪氏と云ひ昔は祝子（はふり）と稱して舊家てある。

住吉神社

住吉神社　後小松天皇至德元年攝津國住吉神社より勸請したものだと傳へられて材木町の西裏にある、商家の信仰最も厚く境内廣くして風光佳である、鄕社に列してある。

興德寺

興德寺　榮町にあつて京鄕妙心寺末寺で弘安十年宋僧大圓禪師（俗姓四）の開基である、二世壽峰・三世大圭に至つて益〻壯嚴を加へ、蘆名氏亦深く之に歸依し、別院を建つると二十四宇莊園亦之にかなひて多く、應永廿三年當寺を以て天下の十刹の一に列するに至つた、後ち天正伊達政宗の亂に侵掠に遭ひ、蒲生氏鄕封に就くに及んで祿二百石を附した、恐らく此の關係によるものであらうが、氏鄕卒するや京都紫野大德寺に葬り分骨を當寺に納め尙氏鄕の墳墓五輪塔今に存し、又肖像が一幅納めてある、贊は慶長二年南禪寺靈三和尙の作文で、其の肖像は集古十種にも載せてあつて有名なものである、前庭に青銅の撫牛がある。

蒲生氏鄕の肖像

實相寺

實相寺　馬場町にあつて淨土宗に屬す、緣起によると開山は大光禪師で元德年中蘆名の家臣富田將監の歸依によつて建てたものである、後ち關東十刹の班に列した程の寺で蒲生秀行の時には百五十石の寺領を附せられたのである。

高巖寺

高巖寺　馬場下五ノ町にあつて淨土宗知恩院の末寺で、文明六年岌天上人の開基である、大永二年蘆名盛舜、其の父盛高の位牌を當寺に安置して菩提寺となし、後ち寬永四年蒲生忠鄕を當寺に葬つた、忠鄕の五輪塔及び束帶の木像今尙存してある。

蒲生忠鄕の木像

阿彌陀寺

阿彌陀寺　七日町にあり淨土宗に屬し慶長八年良然上人の開基である、三層樓の堂があつて俗に御三階と稱し、境内の銅の大佛は明治三年飯盛山榮螺堂から移したものである、戊辰の役に戰死したる藩士の墳墓があつて毎年八月二十二日を以て追弔會を行ひ、三月廿三日には御花祭を營

融通寺

實成寺

長命寺

若松市外の名勝舊蹟

東山の名稱

み舊藩士・諸學校生徒及び一般市民の參拜者陸續として絶えぬのである。

融通寺　大町にあつて知恩院末の淨土宗で寺領二百石の寺である、境内廣く戊辰の役戰役したる官軍卽ち薩長土其の他諸藩の戰役者を葬り招魂社を奉祀してある。

實成寺　同じく大町にあつて嘉元二年僧日尊の草創する所である。

長命寺　西名子屋町にあつて眞宗東本願寺の坊地で、慶長十年本願寺十二世敎如の創立で輪番の地である、明治戊辰の役に戰死したる藩士の墳墓がある。

さて市内の巡覽を終れば是れから少しく郊外の名勝地を探ることゝして、先づ最も有名な東山溫泉方面の東郊を見るのが順である、東山とは若松市の東部の諸村を合併して廣く呼ふのであるが、之はもと位置の關係から東方の山蜂一帶を斯く呼び習はしたる所なら名付けたものであらう、然し四方山に圍まれて居る會津の都會なる若松が、西方は遙かに開けて東の一方半里内外の近郊に、高からず低からざる丘陵が一帶に連つて屏風を廻したやうな所は、何となく京都の風景を忍ばしむるに足るものがある、實に東山一帶の山川は若松の一大公園である。

東山溫泉

東山溫泉　足跡一たび若松の地に入るものは、是非共此の溫泉に浴さなければ土産話にならぬ、若松からは半里足らず、停車場からでも一里計りの處で舊名は湯本村と云ふのである、「出羽で莊内最上で上の山、此處は會津の東山」と古くから歌はれた處で、東南北は悉く翠蜂青巒に圍まれて、西方の一方僅かに湯川に沿らて若松へ通ずる大道あるのみである、傳說には僧行基の開く所と云ひ又は延元元年俄に溫泉涌出したなどと云ふけれども、之は信じ難き說である、一帶の溪水湯本の中央を貫流して西に流るゝ所、奇巖怪石兩岸に聳え大厦高樓此の間に列つて皆無色

透明清澄なる神泉を引き、春花秋月によろしく三冬雪を賞するも亦妙であるけれども、特に盛夏の避暑を以て第一に推さねばならぬ、溪流淙々として谷に應じ家に答へて自ら涼しく、湯に浴して厭けば軒傳へ直ちに身を清冽なる溪流に投ずることも出來る、實に塵外の別天地である、世多く飯坂溫泉（信夫郡）の奇を說くけれども、彼れに比して東山は確かに一段の上にある、旅館には新瀧樓（湯の又狐湯）向瀧樓（菅の湯又狐湯）を以て上とし、不動湯・二八屋・有馬屋・開新亭等何れも設備に申分がない、近傍に伏見瀧・松島・傘岩・羽黑山湯上神社の名所がある。

怪石奇石勢如飛　忽覺寒風拂我衣　橋上停車呼快絕　溪泉一道噴珠璣　土方久元
荒城樹古擁仙宴　樓閣依然紫翠間　兒女猶關興廢恨　紅弦唱出小京山　旗野鼎堂
東山高くのぼりて秋の夜の月澄みわたる谷川の水　海上胤平

院內御廟

院內の名稱

院內御廟　若松から東山溫泉に通ずる道に沿うて舊院內村の北にある、院內と云ふは昔湯上羽黑權現（今の湯上神社）の別當東光寺の院內であつた所から來たものである、明曆三年正之公の長子正賴君が逝かれた時、此の山を開いて保科家累代の墳墓とせられたので、東西三百間・南北百五十間、滿山の老樹古木蓊鬱間い樣である、正之公の墓は見禰山にあるが正賴君の外、正經・正容・容貞の諸卿を初め一族の墓がある、碑石は何れも丈餘のもので實に立派なものである、院內村の東に背炙峠といふ險路がある、もと白川街道であつたが寛永四年に瀧澤峠を開いて此の道廢れた、太閤下向の時茶屋をかけて休まれた處であるといふことである。

天寧寺

天寧寺　東山街道舊天寧村にあつて應永年間蘆名盛信、僧傑堂の爲めに寺を建てゝ萬松山天寧寺と云うたものが卽ち此の寺である、緣起によれば傑堂は楠正行の弟正義で、幼時戰爭に從ひ負傷して僧となり加賀に赴き梅山和尙に從ひ、後ち越後から會津に來て庵を山下に結んで居つた所が、盛信尊信甚だ篤く遂に寺を建てゝくれたと云ふことで盛信の位牌

主なる寺寶

愛宕山、大龍寺、慶山製陶所

は十六代の盛氏のと共に此の寺にある、又什寶として最も有名なるものは、第六世天附が寺を辭して遠州に赴き、其の臨終に當つて當山に寄進した毘首の畫ける達磨・牧溪の寒山拾得の像及び東波の竹圖であつて、曾て豐臣秀吉黑川城に入る時、時の住僧祥山之を獻ぜんとしたが、秀吉その天下の重寶であるわけを以て之をうけず白銀三十枚を賜はつたと云ふことで、實に稀覯の珍品である、秀吉が之を私せなかつたといふことは實に名將の行といはねばならぬ、附近に愛宕山・大龍寺・慶山製陶所などがある。

御藥園

御樂園　徒ノ町の東田園の間にあつて舊藩主松平氏の別墅である、園中廣濶樹木茂りて花卉時を失はず、泉石のたゞずまひ凡ならず小亭亦數寄を凝らして閑雅幽樂の趣を具へてゐる、今猶松平家の所有である。

飯盛山

飯盛山　市の東北十丁餘瀧澤村の南にあつて戊辰の役名を天下に轟かしたる白虎隊十有九士殉難の地である、白虎隊の碑は勿論、榮螺堂・宇賀神堂などがあつて、山中一帶の櫻樹・紅葉、春秋の眺め絶えず人々絡繹として年少殉難士の靈魂を弔するのである、實に山上からは若松の市街一眸の下に見えて古城はやゝ南西に偏してゐる、白虎隊の碑は山腹にあつて、石柱の靈門には「精忠貫日月」、「勁節凌風霜」の十文字を左右に刻し、中に高さ八尺幅四尺の碑がある、篆額は舊藩主故松平容保公の書、文は山川大藏として當年の勇名を馳せた故男爵山川浩氏の撰である、五百餘字悉く白虎隊並に戊辰役の顚末を記したもので、讀むものをして流涕慨歎往時を追懷せしめて停回顧望去る能はざらしむるのである、殉難十九士の氏名年齢は左の如くである。

白虎隊墳墓

殉難十九士

井深茂太郎(十六)　石山虎之助(十六)　伊藤俊彦(十七)
石田和助(十六)　池上新太郎(十六)　伊藤悌次郎(十七)
林八十次(十六)　西川勝太郎(十六)　津川喜代美(十六)

津田捨藏(十六)　永瀨雄治(十六)　野村駒四郎(十七)
簗瀨勝三郎(十七)　簗瀨武治(十六)　間瀨源七郎(十七)
有賀織之助(十六)　安達藤三郎(十七)　篠田儀三郎(十七)
鈴木源吉(十六)

又松平容保公及山川浩氏の弔歌は並びに石に刻して存してある。

いく人の涙はいしにそゝぐともその名は世々に朽じとぞ思ふ　源容保
くもりなき月日は照せ國の爲めさらしゝかばねくちはつるとも　山川浩

榮螺堂

傍に榮螺堂と稱する圓通の三匝堂がある、寛政八年の建立で三層にして六稜を有し、高八間半下の直徑三間半漸々に盤旋して昇り、又漸々に降り恰も榮螺の殼に似て居るので此の名稱を附したものである、此の西に並んで宇賀神堂があつて白虎隊十九士の木像と、萱野權兵衛の木像とを安置してある、又飯盛山の下には太夫櫻がある、昔或る遊女が觀櫻の折故あつて殺されたので、時人之を憐み櫻を墓畔に植ゑたもの卽ち是れであると傳へられてある、又澁澤街の北田圃の中に有名な石部櫻と云ふが

宇賀神堂

太夫櫻

石部櫻

澤瀉峠

ある、蘆名の臣石部某が遺愛の櫻で、一幹數枝となつて四面に蟠り五百年以上の老木である、天明六年藩公周圍に柵を結び制札を立てゝ保護せしめた、盛花の候は一團の雲の如く看客想はず賞嘆の聲を漏すのである、後人石碑を立てゝ千種有功・村田春海の歌を刻す。

うゑおきし人の心の花櫻にほへちとせも苦むさずして　正三位有功
野となりしのちもかたみと春毎に咲や昔の庭さくら花　村田春海

瀧澤峠　瀧澤村から東すれば直ちに峠に達し、寛永中から白川街道として江戸に通ずる道路となつたのであるが、泥濘深く行路困難であつたから、寛永九年(加藤明成の時)から數萬の工を起して二尺餘の石を一面に敷いて十三年に成就し、それから非常に往還が便利になつたと云ふことである、若松からは片上りて滿山松樹密生し其の頂上からは會津の山水一眸に鍾めることが出來る、金堀から强清水を經て舊藩時の狩場であつた大野原

石ヶ森鑛山

一箕山八幡宮
大塚山公園

に出れば、間もなく猪苗代湖畔の戸之口へも出られるのである、金堀の北二十丁計りの石ヶ森山は金鑛のあつた所で有名である、之を發見した者は田邊甚十郎と云ふ農民で、蒲生氏郷盛に之を開坑し八年間に砂金一萬九千九百廿貫を得、後ち水害に苦められておつたが松崎傳兵衞の抽水法によつて、更に十年間に一萬八百二貫目を得るに至つた、俗說には忠郷此の金を以て茶器・天井を作つたと傳へられてある、其の後益〻盛で寛永廿年正之公の就封するや、萬治元年まで十六年間に一萬六千四百兩、吹金三十八貫四百匁を貢いだといふことである、其の盛んであつたことも大凡わかるのである、一箕山八幡宮・大塚山公園は何れも瀧澤村から若松に行く間にある、一箕山は、源義家後三年役記念の爲め役夫一人毎に一箕づゝ土を運ばしめて丘陵を築き、其の上に八幡宮を奉齋したるを以て此の名ありと稱せられてある、然し是は固より信ぜられぬが一箕は齋(いつき)から

蘆名塚

小田山

本郷町

來たゞらうと云ふ說は無稽として斥くべきでない、大塚山公園は高四十八間周圍十丁計り、昔は中腹に蝦夷穴とて六個の穴があつたといふが今は其跡を殘すのみである、近年開いて公園となしたのである。

蘆名塚　府城の東南湯川を隔てたる小田山附近(北會津郡門田村大字黑岩)にある、盛氏・盛隆の墓東西相並びて就れも五輪塔を立て東が盛氏のである、又其の西北に二の塚があつて或は盛興(盛氏の子)及び龜王(盛隆の子)の墓ならんと云ふけれども詳かでない、小田山は寛文以來士民の葬地である、高四十丈あつて此の山からは城が十丁計りの處に眼下に見下すことが出來て、城の要害には聊か邪魔物である、されば戊辰の戰役には官軍之を占領して盛んに城中に砲火を浴(あ)びせかけたものである。

本郷町　若松の西南端材木町から僅に一里半許、大沼郡に屬して其の治所高田町からは東南二里の地にあつて有名なる陶器の產地で、世間に

會津燒の由來

は一般に會津燒として聞えてゐる、抑〻會津に於ける製陶の由來を繹ぬるに、文祿二年蒲生氏郷城郭修理の時、屋瓦製造の爲めに播磨國から瓦工を招いて城南青木組小田村で燒かしめたのが始めである、保科正之公の時に至つて、美濃國の陶工水野源左衛門成治といふ者仙道長沼に來りて製陶に從事してゐることを聞き、正保三年之を招いて俸米五十俵を給ひ小田の瓦窯を本郷に移して燒かしめた、然るに當時別に本郷の山中から適當の土石を發見して種々の茶器を作らしめたものが、即ち本郷燒の濫觴である、幾何もなくして源左衛門歿したから、其の弟長兵衛（後ち藩主の命によつて名を瀨戸右衛門と改めたといふ）と云ふ者の猶長沼にあるを招いて製陶に從事せしめられた、是れから一般に領内に擴まつたが、磁器の如く堅牢でなかつたので、安永六年江戸から磁器工を聘し、本郷の人佐藤伊兵衛豐儀等をして就いて學ばしめた、然し苦窯多くして完全の器を製すること出來なく、陶工某も辭して歸るに至つた、そこで寛政九年伊兵衛藩命によつて關西諸國から九州にも渡つて普く研究し、同十一年歸國して新窯を築いて始めて堅牢なる磁器を製出してから、會津燒の名聲漸次諸國に聞えるに至つたのである、又寛文の頃右の瀨戸右衛門の弟子上荒井新田村の植松甚左衛門・栗城吉左衛門の二人が本郷と僅に一堰を隔つる北會津郡川南（かはなみ）村に於て陶窯を開き、是も亦年と共に盛大に赴いて本郷燒と共に近國の需要を充たすに至つた、是も亦本郷燒と稱せられて明治に至つて益〻盛大に赴き、海外へも輸出し共に年額十六萬圓以上の產出を見るに至つたのである、從來は專ら內國向・實用向きであつたが近年輸出向の製作に苦心し其の取引漸く盛況を呈すると、又其の原料が電氣用器の製作に適するに依つて現今は一方專ら電氣用器の製作に從事し、內國向は之れに次ぐに至り、產額から云へば電氣用器・輸出向・內國向の順である、其の常勝寺には源左

水野源左衛門成治

木郷燒起る

佐藤伊兵衛豐儀

川南陶窯起る

祖靈堂
窯業徒弟學校
岩崎山
小谷、蘆の牧温泉

衞門並に伊兵衞の兩祖を祀れる祖靈堂がある、近年時運の進歩に伴ひ益改良發展の必要を認め窯業徒弟學校を起して職工の養成につとめてゐる、又町の東南五町に岩崎山といふのがあつて、去る四十一年皇太子殿下の行啓記念として、山上に公園を築いて遊覽地とした、山上に立つて北望すれば、會津の平野一眸の内に集まり、脚下直ちに大川の巨流に臨み風景最も奇勝を以て名ある所である、山頂には馬頭觀音辨財天の小祠がある、其の城址は蘆名盛氏の築く所である。

本郷の南方大川に臨んで小谷・蘆の牧の二溫泉川を挾んで相對して居る、若松からは何れも三里計りで、田島街道の西傍に當つて車馬の便もある、湯は川原に湧き出るまゝに粗末な板圍ひで僅かに雨露を凌ぐ丈けであつて、宿屋と云うても至極輕便簡易なものであるが、岩に激して雪を欺き、碧潭湛へて鏡の如き大川の流れを小さな舟で綱を辿つて客を運搬して呉れる所などは、危險と云へば此の上もない危險ではあるけれども一度は行つて見るも可い處である。

八葉寺
阿彌陀堂
會津の高野

八葉寺　眞言宗に屬し河沼郡堂島村字冬木澤村にある、寺傳によれば村上天皇の康保元年空也上人の創立で、自佛像・經卷を納め、又彌陀の像を安置し閼伽井を堀つた所が、中に八葉の蓮華が生いたといふので八葉寺と號したといふことである、天正十七年伊達氏亂入の時住僧宥傳は蘆名の重臣富田美作の弟であるので弔合戰の準備をしてゐることを聞き、政宗火を放つて之を燒いた、其の後文祿年中に至つて再建した、これ卽ち今の阿彌陀堂である、この堂は方三間、單層茅葺入母屋造りで、其の手法は禪宗風を帶び、繪樣彫刻能く當時の形式を現はし、特に内部の須彌壇の繰形及び高欄の形狀並に彫刻優秀の故を以て、先年特別保護建造物に列せられたのである、俗に會津の高野と稱へ毎年七月朔日から十日

まで遠近來集して死者の冥福を祈るのである、堂北に空也上人の墓がある。

二階堂延命寺
地藏堂
藤倉氏居館址
難波池
神指城址

二階堂延命寺　同郡日橋村字藤倉にあつて眞言宗に屬し、創立年代由緒等は詳でないが、土俗二階堂と稱する四間四方南面重層の地藏堂は近年特別保護建造物になつた、座長八寸の地藏尊は春日作と傳へられてある、此の藤倉といふ地は、佐原義連の孫義盛の居館の地として有名である、又二階堂の東にある難波池は、源義經が幼時奥州に落ちて來た時鬼一法眼の娘皆鶴姫之を追うて此の池に來り身を投じて死んだ池であると傳へられてあるが、其の荒誕信ずるに足らぬことは辯を俟たぬ。

神指城址　若松の西方里餘、北會津郡神指村舊上神指村にあつて、或は香指城とも書いてある、上杉景勝、石田三成と東西相應じて兵を擧げる手筈を定め、若松城の山に近く守備自ら不便なるを憂ひて、初めは河沼郡北田（北田氏の舊館）に移さうとしたが、地勢面白くなかつたので遂に此處に決定し、慶長五年二月十日其の臣直江兼續總奉行の下に築城に着手し、本丸は三月十八日から六月朔日まで七十二日間で家中の人夫を以て築き、二之丸は五月十日から六月朔日まで廿日間で越後・仙道・米澤及び會津四郡の人夫十二万を督して作つたのである、本丸東西一町四十間・南北二町五十間、二之丸東西四町廿間・南北四町五十間といふこと見えてあるが、今は大方畑地になつて唯殘壘の當時の面影を語るのみである、德川家康會津征伐の爲めに出兵した頃は、まだ普請中で材木奉行滿願寺仙右衞門柿色手拭を鉢卷にして、毎日馬上で七日町を通り普請を沙汰しておつたといふことである、敵を眼前に控へての城普請とは一寸今樣の考では出來ぬ藝當で、誠に戰國時代豪宕洒脫の空氣を吸つた武將の面目躍如たるものがある、近傍の幕内村は其の昔佐原十郎左衞門尉義連下向の時油

直江兼續築城總奉行
幕内村

蔬菜の産地

幕を張つた所であるといふので、此の名を附したと傳へられてある、然し之れに就ては疑はしきとも多い、精しくは歴史の部を參看せられんことを乞ふ、此の幕内村は地味豐沃特に蔬菜の栽培に適し、味美にして會津第一の菜園である、近時は汽車便を利用して、縣下は勿論宮城・青森の諸縣より東京方面までも盛に輸出するに至つて、今や會津の特産として數へらるゝに至つたのである。

喜多方地方

喜多方町

喜多方八萬石

喜多方町　鐵道若松を發して名産九重・名高き鹽川驛を經れば、直ちに喜多方町に達す、人口九千餘耶麻郡衙の所在地で會津第二の都邑である、昔は喜多方八萬石と稱せられて土地の豐饒を以て有名で、米の美味なるは實に會津第一である、且つ企業心に富んで商況の活潑なることは或

製品の粗造濫作

熱鹽溫泉

は若松に優つて居る點もある、從つて商工業も盛で就中漆器・生絲は最も有名なものである、然し製品は若松に比すれば概して粗物安價のもの多く精巧優美なものに至つては甚だ少い、是は將來の發展策を講ずる上から見ても、大に戒むべき點ではあるまいか、然し若松に對抗してやつて行かうとする勇氣と熱心とに至つては、大に賞讃せざるを得ない、旅館には西町の笹屋・形屋、東町の桝屋等がよい。

熱鹽溫泉　喜多方の北方一里餘にあつて有名な鹽泉である、鑛泉は滾滾として村の中央に溢れ、一大浴槽を構へて浴室となし、其の周圍に旅館相駢んで刻石傳へに浴室に行けるのである、殆んど山間の溪谷の如き有樣で、水に乏しきは遺憾であるが、滿山の青葉若葉翠綠滴るの頃杜鵑の聲に夜の短かきを嘆ずるのも一興であらう、何と云うても會津では東山につぐ溫泉で、旅館には笹屋を第一とし吉田屋・薩摩屋・ふびや・叶屋・倉

瓜生岩子の出生地

田屋等である、明治の慈善家として有名なる瓜生岩子刀自（東京淺草公園に刀自の銅像あり）は實に此の地の人である、而して刀自の功績については、鄉里に於ては人多く之を知らず却て世間に鳴り渡つて居るのも實に不思議である、近傍押切川の上流に日中溫泉（につちゆう）といふがある、亞酸化鐵が多量に過ぎて漸赤褐色を帶びておるが、其の切疵に特效あるを以て名を博してゐる。

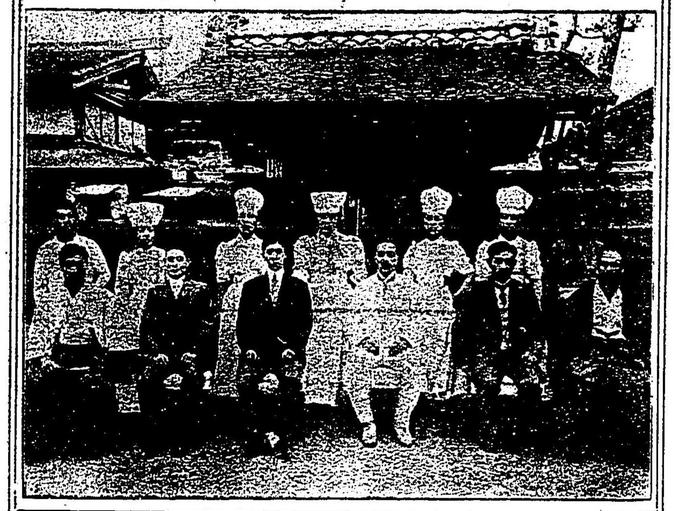
日中溫泉

示現寺

示現寺　熱鹽村にあつて曹洞宗護法山と號し昔は眞言宗の道場であつたのである、那須の殺生石で有名な源翁和尙の開基であるが、源翁のことは諸書異同があつて確な所がわからない、塔寺八幡長帳に明應七年源翁百年忌のことが見えてあるから、逆算すれば應永五年に歿したやうであるが之も固より確なものとは云ひ難いのである、そは兎も角此の寺は會津に於ける靈場であつて、唐門・鐘樓門・觀音堂・本堂（法王殿）・開山堂などが儼存してある、湯館山公園亦眺望に富んで浴客の杖を曳くに足る

湯館山公園

若松市七日町
（診察入院隨時）
私立會津病院
院長　古川源次郎
電話五八番
電信略號アフ



和洋御料理清龜樓
岩代若松市榮町
吉田龜造
電話二三五

若松市片原町廿七番地
梨之木染店　福田利喜藏

熱鹽温泉場

喜多方市街

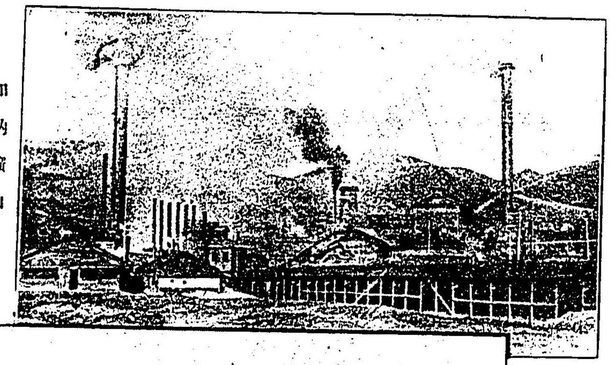
熱鹽示現寺

國産木綿織物

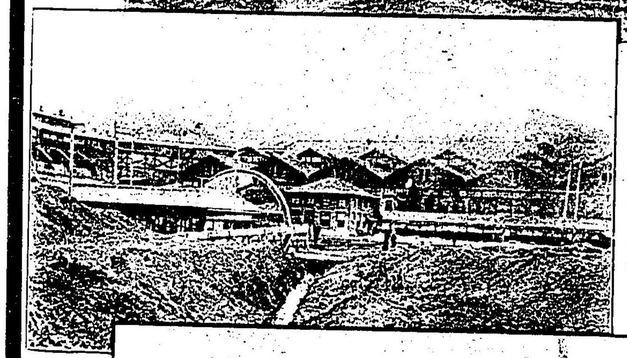
若松市日吉町十九番地
原山金四郎商店
卸賣部　電話三四二一番
電略「ハキ」又は「ハ」

北會津郡神指村
原山機業工場

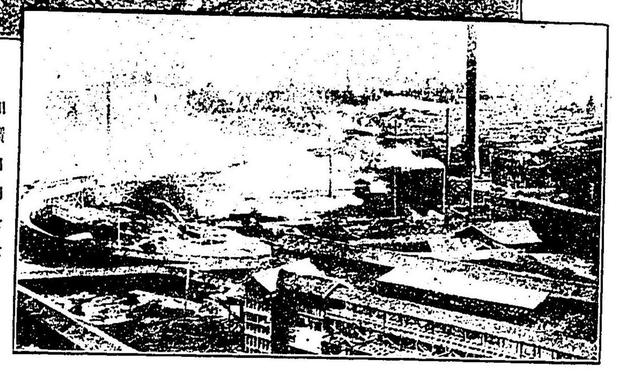
會津特產塗下駄製造
鼻緒爪掛傘類卸商
岩代若松市大町一ノ町
手代木豐藏
電話百十三番
振替口座八九五五



加納鑛山



加納鑛山撰鑛場



加鑛山納全景

會津物産會三等賞受領
品評
奥羽六縣聯合共進會四等褒狀受領
福島縣清酒品評會三等賞受領

登錄商標酒 大和川
岩代國喜多方町
醸造元 佐藤彌右衛門

和洋
御料理
うなぎ
かば燒
岩代國喜多方町
御清水公園 松聲館
電話六十二番

本店 若松市七日町二丁目
電話 二二五番
支店 若松市中一之町
電話 四三〇番
小樋山小間物店

岩代若松市榮町
和洋御料理
千歳壽司 清風樓
柾屋德四郎
電話百三十二番

珍菓
新製
九重
ぶどう九重

此九重は原料を精撰し殊に衛生に害なからしめ香氣を加へ調製せしものにして体裁優美紳士淑女の御進物品に適宜なるは勿論入浴御旅行等に携帶なされ珈琲茶の代用として頗る珍菓なり御試用の上續々御購求の程奉願上候

用法
茶呑なれば一匙(ヒトサジ)立入れ熱湯を注入して御飲用あれ香味共に美なり

本舗製造元
岩代國耶麻郡鹽川町
栗村千代吉
同郡喜多方町
栗村支店

ものである。

加納鑛山　喜多方停車場を距ること西北二里餘の處にある、その發見の時代は詳かでないが口碑の傳へによると、寛永年間加藤嘉明の時代から銀を採掘したやうである、其の後廢坑に歸したのを、近年に至つて數多の鑛主を代へ明治四十年三月遂に加納鑛山株式會社の有となつたのである、規模頗る大仕掛で資本金五百萬圓、使役鑛夫千五百、人口四千餘に達し、山内に病院・學校・郵便局・寺院・商店などの設備もあつて立派な小市街をなしてゐる、製煉場は宏大で、中にもその熔鑛爐は日本第一の大さであると稱してゐる、鑛產としては銅が主で又盛に亞鉛をも產出し、月額銅は十五萬斤、亞鉛は二百五十噸に達するの盛況である。

其の南方加納村の內半在家村は佐原義連の墳墓地といふので其の碑文がある、然し既に歷史の部にも述べた通り此の事は確とわからぬが、義連

の孫盛時は加納莊を領したといふことが見えてゐるから、何等かの關係は無論あつたらうと思はれる、荒廢久しくして知れる人もなかつたのを慨して、正之公家臣に命じて封内を巡らしめ、漸くのとて之を探り山崎闇齋をして文を撰ましめたが志を果たさずして卒し、後ち元祿八年正容公の時に至つて建てたものである、又喜多方町の西南二里餘慶德村大字新宮は佐原義連の孫時連の治所であることは既に述べた所である、其の熊野神社は天喜年中源義家の勸請といふ傳へてある、文珠堂は其の域内にあつて、何れも里人の尊崇する所で會津に於ける古社たるを失はぬのである。

新宮村熊野神社

檜原　耶麻郡の東北隅羽前の國境に近く米澤街道に沿ひ若松からは八里の行程である、磐梯山の陰に當つて全く山間の小村落に過ぎないけれども、古來要害の國境として又金鑛の所在地として有名なもので、現今

檜原

檜ノ木谷地

檜原金山

大鹽村

の村里は二十一年の磐梯山の噴火によつて、舊村墟が湖底に沒したので新に其の南方に移つたものである、昔は檜ノ木谷地と稱し不毛の地であるから、村民專ら木地を挽き望陀と稱する木の皮を剝ぎ、或は旅店を設け駄馬を追つて生計を立てゝ居る、然し奥羽線が布設せられてからは、旅客も少くなつたので一層淋れた感がある、其の峠は有名な險峻難路で山を盤旋して上るところは全く羊腸の趣がある、一夫當關萬夫無開とは之を云うたものかと首肯せらるゝのである、其の鑛山は天正の頃から採掘したもので、慶長十年熊野派の修驗中常坊と云ふ者が來て坑を穿ち多く金銀を採り、其の金坑の中に五十兩と云ふ字が殘つてゐるのは月に五十兩の金を產した所から附けたものである、何時の頃よりか中絕したのを、明治に至て再堀に着手したが失敗に終つたやうである、檜原村の西南萱峠を經て大鹽村といふがあつて、村中を貫流する大鹽川の端に二つの鹽

鹽井

井がある、昔は鹽を燒いたといふことであるが今はそれ程の用には役立て居ぬやうである、「海士もなく浦ならずして陸奥の山賤の汲む大鹽の里」といふ歌は西行法師の詠として有名であるが、歌調斷じて西行の歌ではない、恐らくは後人の附會したものであらう。

山三郷

山三郷地方

耶麻郡西偏の汎稱で、喜多方の西方山を越えれば直ちに此の地方に至り全く別天地をなして居る、山三郷と云ふは、其の名の示す如く山間の三郷の意で、三郷といふのは藩政の時木曾・大谷・吉田の三組に分れておつて、其の木曾組に小布瀨郷があり、大谷組に野尻郷があり、吉田組に奥川郷があつて、卽ち此の三郷から來たものらしい、固より深山幽谷に富んで田園の便少ないけれども、其深林は杉・山毛欅・栗・檜等の良材に富んで古來有名なものである、只交通不便の爲め運搬意の如くならず、世の中からも殆んど忘れられた有樣であつた所が、遂に時を

山林

得て昨四十三年十二月に此の地の中心たる山都驛まで、喜多方から鐵道の開通を見るに至つて、此の無限の寶庫は開放せらるに至つたのである、加之此の地方には又鑛山の見込も大分あるらしいから將來發展の餘地は大にあると云はねばならぬ、信州の木曾谷も日本有數の山林地として有名であるが同じく木曾と云ふ地名を有する此の地方も亦良材を以て天下に名聲を博するに至らんとするは面白いとである、さて此の山三郷の中心地は山都村で昔木曾と云うた所である、地勢から云へば阿賀川と一ノ戸川と交會の點で南方に偏在はしておるが、山間の平地他に之れないのみならず、大河を控へ且つ又鐵道の便もあるから何と云うても中心的一小都邑である、盛夏の候猶皚々たる白雪を見るので有名な飯豐山は衆山環拱して西北隅岩代・羽前・越後の國境に峙ち其の最高峯大日嶽は六千二百餘尺の高さを有して居る、其の飯豐山神社は靈顯新なる社として毎年

信州の木曾と會津の木曾

山都村

飯豐山

夏季の候登者甚だ多く、必ず參詣すべきものとしてある位て、會津方面に於ける登山客は一ノ戸からするのである、一王子から五王子に至る所謂五社王子がある、而して此の山を役行者又は空海の開基などゝ稱するけれども之は固より信をおき難い、五社王子と稱するのは腰王子で卽ち越君の祖神であらうとの說が正しいやうである、して見ると寧ろ越後の方に緣が近いやうでもある、又此の山は高山植物の產地としても有名なものである。

坂下町

坂下地方

坂下町　若松の西北三里計りの處て越後街道の要路に當り、殆んど會津の中央に位置してある、人口五千餘もとは若松を除いて喜多方と其の繁盛を競つたものだが、產業其の他の關係から今は倒底其の敵てなくなつた、加之近年大火打續いて大に舊觀を失ふに至つたやうてある、昔は番下と書いたもので文祿の頃から坂下の字になつたやうてある、又昔は西の方高寺の坂下にあつたから、かく呼ぶに至つたものてあるといふことてある、旅館には鹽屋·吉野屋·坂田屋·綿屋など、又金融機關としては加藤銀行といふのがある、これから山手に入ると葉煙草·人參等の栽培が盛てある。

坂下の名稱

塔寺觀音

塔寺觀音堂　坂下の西、塔寺村にあり、昔は宇內村にあつて高寺と稱し眞言の道場として磐梯の惠日寺と相駢んて有名なものてあつた、緣起に齊明天皇の四年性空上人の弟子蓮空上人草創する所の金塔山惠隆寺が卽ち是てある、後ち坂上田村麿の修築を經て益〻榮え昔は寺內三十六坊、遠近の脇院坊舍三千と稱せられてあるから其の盛大てあつたともわかる、其の觀音堂の本尊千手觀音は弘法大師の彫刻する所て有名なる

塔寺八幡宮

立木の觀音と稱するものである、此の寺は曾て惠日寺に屬し源氏の敵となつた關係から、佐原氏の世文治・建久の頃大に廢れて坊舍多く退轉した際に今の地に移つたものである、觀音堂は五間四面單層四柱造茅葺の屋根で、建築の手法頗る雄大、建久年間のものとするも妨ぐる所なしといふ廉で、近年特別保護建造物に編入せられた、會津三十三觀音の一で境内には三佛堂其の他の建物がある。

心清水八幡宮　立木觀音堂の西にあつて塔寺八幡宮として知られてある、緣起には後冷泉天皇の天喜三年石清水八幡宮を勸請して源頼義が建立したとあるけれども、固より詳ではない、本社は拜殿の後方高丘にあつて上下の二坂百一級の石階を上る所にある、西北は山嶺に據り、東南開けて會津平野の遠景近況眼下に横はり風景最も掬すべきものがある、寶物には塔寺八幡宮長帳・源義家の鎧・伊達政宗の寄進狀等が重なもの

塔寺八幡宮長帳

柳津圓藏寺

で、その長帳は卷軸長大の故に名づけたもので、往古は毎年正月七日から十日まで神前で般若を誦し、導師の名並に卷數を記したが、文和の頃から毎年見聞する所の治亂祥災を其の裏に記し、相繼て寛永の中葉に至て廢したもので、續群書類從・史籍集覽・新編會津風土記にも收められて有名なものである、一體東北地方は極めて史料に乏しいのだから、此の書の如きは實に貴重すべきものである、本書には東京帝國大學の影寫本によつて寫眞版として入れておいたが、原本を寫す暇がなかつたことは實に遺憾である。

柳津　會津第一の靈場巨刹たる圓藏寺の所在地として其の名遠近に聞えてある、寺の名は知らぬ人もあるが柳津の名を知らぬ人は先づないと云うても可い位て、塔寺の西七折の嶮坂を下つて七八丁、坂本村の追分で越後街道から別れて左に入ればやがて柳津に到るのである、柳津は昔

柳津と圓藏寺とに於ける關係は恰日光と東照宮に於けるか如し

日本三虛空藏

菊光堂

巖坂と云ひ只見川の流れに沿ひ、百三十戸計りの山間の一村であるが、それが悉く一の圓藏寺のお蔭でやつて行けるといふに至つては、大小の差こそあれ、日光の東照宮に於けると同一の關係を見出すことが出來るであらう、而して又今更ながら信仰心の偉大なるに驚嘆せざを得ないのである、さて其の圓藏寺は臨濟宗妙心寺派に屬し、弘法の佛弟子德一の建立で、弘仁三年塔寺成就して入佛供養目出度相濟み、福滿虛空藏菊光佛と稱し、常州村松・房州清澄の虛空藏と共に日本三虛空藏と稱し、數多の塔頭を有し靈驗新にして最も尊信を受け、天正十八年豐臣秀次下向の時自ら參拜して寺領二百石を寄せ、保科氏の世となりても書替の黑印を渡して保護せしめたものである、元龜の頃は輪奐の美壯麗を極め「光り堂」の稱があつたといふことであるが、文政元年の火災で烏有に歸し、今の
は其の再建である、菊光堂と稱する本堂は福滿虛空藏を安置し、桁行十

寺寶

十三講

七日堂

一間半・梁間九間・棟の高十八間、四方椽三層四稜の大伽藍である、又本堂左右の袖から南に延びて、數丈の高さに屹立せる巉岩の上に架せる舞臺は、此の地方で京都清水の舞臺と相雙で自慢の一つにしてゐるもので東西十二間・南北五間程ある、擬寶珠づきの高欄に凭つて見渡すと、下には只見川奇岩怪石に激して流れ、御神樂・博士の諸山は雲煙の間に隱見し對岸の風物呼べば答へんとするの概がある、安井息軒も「僧房市店夾溪而居、亦皆倚奇石負怪松、無一凡形、信乎名不虛傳也」と激稱してあるのを見てもわかる、寺寶には上杉・景勝・加藤・嘉明の文書を初め狩野常信・同永信・土佐光信等の繪畫、佛像・器物等の數が非常に多い、會津地方の習俗で男女共十三歳に達すれば必ず參詣して開運・出世を祈ることになつて居る、之を十三講とも十三詣りとも稱し三月十三日が其の緣日になつて居る、又七日堂と稱して正月七日には、人々積雪寒風をも厭はず牛王の墨影

魚淵

を得んとして裸體となつて桃み爭ふ奇習もあるといふことである、只見川の東岸一帶の清流を湛へ渦狀をなして居る所は魚淵と稱して古來獵を禁じ、若し之を犯せば必ず禍ありと稱する所である、大小歳千の魚鱗悠々波間に躍つて、人の餌を投ずるのを待つて居る樣は又一の奇觀といふべきである、只見川に露出して居る石は奇岩怪石のみで夫々龜石・船石等の名稱がある。

嬰粟大黑

北州名勝是禪刹　寺在嶮峻萬壑灣　夜枕夢清連岸水　暮鐘聲落牛空山　類三樹三郎

此の地の名物には有名な嬰粟大黑天の彫刻がある、之は柳津六坊の一なる月本墨仙翁の作で、靈妙不可思議なる此の技術を不習不慣の裡に自ら得る所あつて、無心に運ぶ一刀は忽ち大黑天の微妙精緻なる彫刻となつて現はれて來るのである、其の小なるものは嬰粟粒の中にも入るといふので此の名を博したもので、精巧美麗眞に人力と思はれぬものである、

野澤町

雷山公園

阿賀川の急流

買ふに珍らしく、贈るに結構なる此の緣喜物は知人への土產物として是非共遊覽客の鞄に入れねばならぬものである、旅館には小川屋・杉本屋・內田屋・東屋・鈴木屋・前川屋・みなとや等。

野澤町　坂下の西方五里越後街道の要地で岩越鐵道の停車場が今工事中である、開通の曉は面目一新の趣があらうと期待せられてゐる、此の地方は往古湖水であつたが、滯水を決して本町の民居を開き、又曠原について町を設いた所から、原町と稱する所がある、又野澤と云ふのは町の南に野澤と稱する一澗あるによつて命名したものである、近年愛宕山神社並に如法寺境內一帶高地を以て、雷山公園と云ふを作つて清遊に供してゐる、旅館には布袋屋・新布袋屋・十一鹽屋等がある、更に越後街道を西北に進むこと二里にして群岡村といふに至れば、いよ〳〵越後界に接近するので風俗などもやゝ純會津的でなくなつて來る、阿賀川の流れ

最も奇觀を極めて赤髮大判藏・小半藏瀨ヵ川口などゝ稱する急湍激流至るところに散在して、行客の眼を喜ばしむること一ト通りではない、俗にトリ瀧と稱するのはかゝる急湍を利用して、柵をしつらひ魚を捕る所をいふのであつて、頗る奇觀だといふことである。

勝常寺　坂下町の東北一里餘、若松からは二里半計り西北で、鹽川驛からは日橋川を越えて一里餘の河沼郡勝常村の內にある寺である、眞言宗で昔は寺の領料であつた所から勝常寺村と稱したが、後ち寺の字を省いて單に勝常村と呼ぶやうになつた、弘法大師の囑によつて僧德一の建立である其の藥師堂は本寺卽ち惠日寺等と共に會津五藥師（耶麻郡本寺村・河沼郡字內村・北會津郡堤澤村・河沼郡並に勝常の五箇所。）の一て、此の寺が中央に位するので一に會津中央藥師堂と呼ばれてある、堂は桁行五間・梁五間、單層屋四注して茅を以て葺かれ中に七尺の藥師を安置してある、建築の手法頗る優秀なるを以て近年

勝常寺

會津中央藥師堂

特別保護建造物に列せられ佛像三軀も國寶に列せられてある、境內の喬樹に巢を作つて無數の群をなす鷲は又名物の一て里俗藥師のお使と稱し決して捕獲することが出來ぬものにして居るのである、その北田館趾は佐原義連の孫北田次郎廣盛以來其の子孫此處に住しておつたが應永十六年に至つて滅びた又慶長五年上杉景勝は若松城をこゝに移さんとしたこともあつたが、之は中止して遂に神指城を築くに至つたのである。

北田館址

高田地方

高田町

高田町　會津平野の西南隅を占め、大沼郡役所の所在地で人口三千餘、若松からは二里半の西方に位して製麻・養蠶の業頗る盛である、又其の梅は高田梅と稱して實子の大きいので有名で、旅館には根本屋・平野屋等がある、然し高田町の知られて居るのは、寧ろ會津第一の名嗣伊佐

須美神社の鎮座ましますのと、今は昔德川家康の智囊となつて彼れを助けた慈眼大師天海僧正の生地としてである、高田町の南方永井野村から奥の方大沼の一部・南會津の地方は、一四維新前には御藏入と稱して幕領であつた、從つて同じ農民でも此の地方のものは大に權力を振廻したものである。

御藏入

伊佐須美神社

國幣中社

伊佐須美神社　宮川の清流に瀕し伊弉諾・伊弉冊二尊を祀り、延喜式神名帳名神大社に列し、貞觀格式正一位の條にも載つてある程の由緒正しい神社で、明治六年國幣中社に列せられたのである、社記によると崇神天皇の御宇、大彦命と武淳河別命の御父子が道を異にして東北を巡視し、會津に於てお逢ひになつたので祭られ、初めは御神樂嶽に祀り、後ち博士山に徙り、又神明嶽に轉じ、欽明天皇の御宇今の地に遷宮せられたといふことで、蘆名氏以來歷代の崇信篤かつたことは勿論である、今

銀盃　奥羽六縣聯合物産共進會
銅牌　第五回內國勸業博覽會
銅牌　東京勸業博覽會

銘酒　國光　一〇　釀造元
最上醤油　吟製　味噌　會津
福島縣會津喜多方町
小原嘉左衛門
電話七四番
電略（ヤマカ）

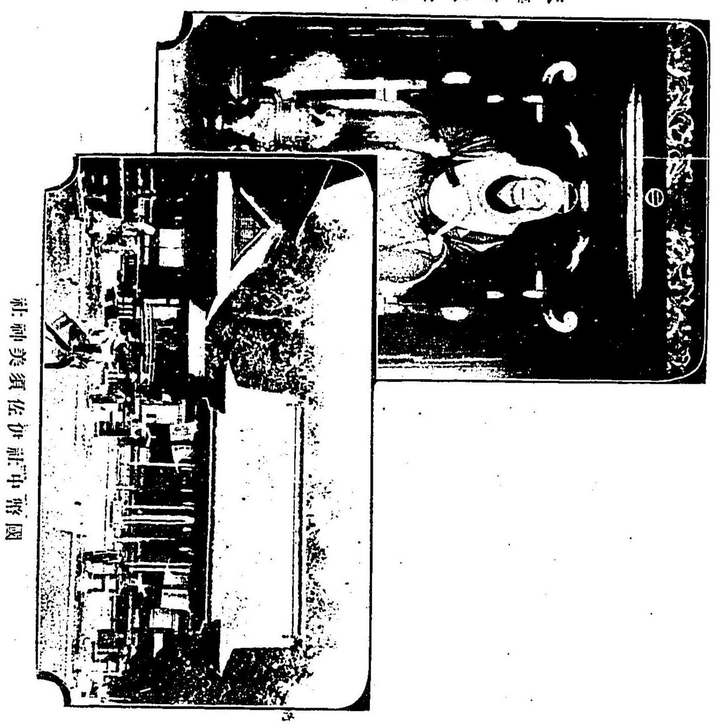
海陸産物
肥料販賣
商
岩代國若松市新横町六番地
佐藤佐吉商店
電略（サトウ）又ハ（サ）
電話（壹八番）
振替一四二〇九番

會津木綿織物問屋
若松市融通寺町八十八番地
利鎧虎吉
電話長百〇六
振替口座（東京）四一九三
發電略號（ヨ）
若松市榮町初分五百九十一番地
鎧織物工場
電話連接百〇六

萬御染物處

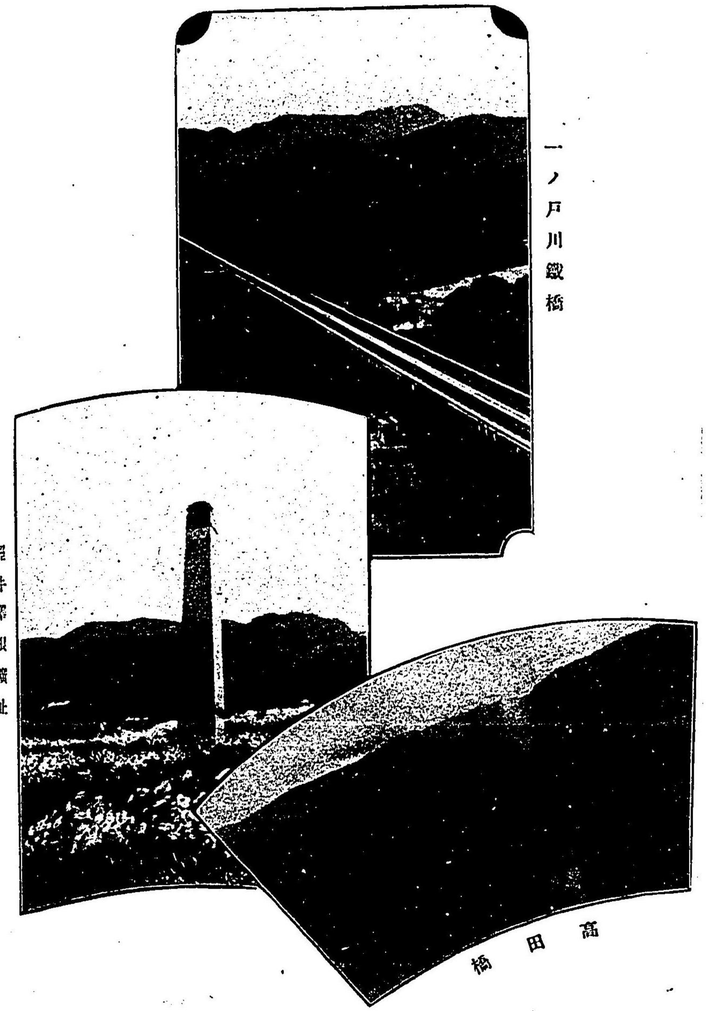
若松市片柳町

古川又兵衛



天海僧正肖像（武藏川越喜多院所藏）

社神美須佐伊耳中殿圖



御田植祭
龍興寺
天海僧正
法用寺
田子藥師堂

の社殿は明治三十二年の造營である、正祭は九月十五日であるが、毎年七月十二日に行はるゝ御田植祭最も世に知られて、此の古式の大祭を拜せんとて遠近より來る者、常に町に溢れる有樣である、又字仲町の龍興寺といふ天台宗の寺は、慈覺大師の開基と稱せられ、有名なる天海僧正は幼時此の寺に入つて時の住僧舜雲に師事し、永祿三年に得度したと傳へられてある、高田の西方十九町雀林村に法用寺といふ寺があつて草創の古さを以て有名である。

田子藥師堂　高田の北方二里新鶴村（若松からは西方三里半）にある、方三間、單層、寶形造り茅葺の屋根で、寺傳によれば建久八年田子重兵衛の創建といふことである、その外の沿革は一向わからないが、建築の形式は足利中世の持色を現はし、禪宗風の建物で各部の繪樣彫刻何れも觀るべく、特に內陣の厨子及び須彌壇は、極めて優秀なるものである、近年特別保護建造

輕井澤銀山

沼澤沼（霧崖）

物に撰定せられたのである。

輕井澤銀山　高田の西方二里半（河沼郡柳津から大凡二里）にあつて、永祿年元松本左文字と云ふ人が發見し、天正年間蒲生氏郷の時代には一日に三百斤を採掘した程であつたが、慶長十七年に至つて廢せられた、後ち元和元年村民善吉と云者始めて坑を穿ち、銀を採るに及んで又榮え、毎月四十貫づゝ出でたと云ふことであるが、寛文の頃には再び廢せられたやうである、明治に至つて新式の採掘法により二十一年度には製銀高六百貫目に及ぶに至つたが、其の後ち銀價の低落により收支相償はず、今は全く廢坑となつて遺跡のみが只當年の盛大を物語つて居る。

沼澤沼　高田町の西方只見川の上流山間に在つて周圍一里餘、昔は霧崖と稱し連山四方を圍んで鏡水其の中に開け積翠澄波の間に浮動して風景尤も幽邃である、只見川の沿岸を下れば卽ち柳津に達するを得て、其の水源まで遡れば群馬縣の境界で尾瀨沼に到るのである、沼澤沼が東方に決潰して只見川に注ぐ所の對岸に早戸溫泉がある、又少しく下流に川口村といふがあつて、そこから只見の支流野尻川の上流には八町溫泉・玉梨溫泉など、云ふのがある、何れも弱鹽溫泉である、又それから少し只見川を下れば瀧屋川（一名中之川）といふ支流がある、此の瀧屋川は源を博士山から發するのであつて、其の川を挾んで西に砂子原溫泉（上渴）東に五疊敷溫泉（下渴）がある、之は此の地方に昔から名あるものであるが、其の外老澤・中之湯・荒湯など、いふ、鹽類性の溫泉もある、旅客は柳津參拜の餘力を驅つて川傳へに來るのが便利であるが、高田町から輕井澤銀山を經ても勿論來ることが出來る、不便の謗は到底免れぬにしても、山に攀ぢ雲に嘯いて自然の大氣を吸ふには最もよい處である。

早戸溫泉
八町溫泉
玉梨溫泉
砂子原溫泉
五疊敷溫泉

田島地方

御藏入

大森林

此處で云ふ田島地方とは會津の西南に當る南會津郡一圓を指して云ふのである、南會津郡は大沼郡の一部と共に舊藩時代には御藏入と呼ばれた幕府の直轄地で、平地と云うては僅かに大川並に只見川の沿岸附近に止まり、殆んど全郡山又山の深山幽谷のみである、されば會津五郡の面積三百二十二方里に對して百四十方里の大面積を有するに拘らず、其の人口は前者の二十三萬に對して僅かに三萬二千の少數で、一方里二十三人弱に過ぎぬとは、内地にも斯る處があるかと驚くばかりである、されば交通不便を極め、人文の發達も從つて非常に幼稚であることは免れぬ、然し其の森林の國有材に編入せられたるもの實に二十二萬餘町歩に達し、福島縣下全國有林の五分の二强を占めてゐる、以て其の大森林であることがわかるであらう、信州木曾に於ける帝室の御料林は、西筑摩郡の一圓に於て僅かに十萬五千餘町歩に過ぎぬ（木曾御料林とは、西筑摩郡の外、信州に於ては上下伊那郡、及び美濃國惠那郡に於ける接續御材料をも含んでゐるけれども、西筑摩郡は實に木曾の本體とも云ふべきものである。）是を以て見るも南會津郡の隱れたる財源として、如何に此の森林が價値あるものであるかを見るに足ると思ふ、交通不便の邊陬にあるを以て、世人が一向に之を知らないのは實に遺憾に堪へぬ所である、而かも片々たる雜木は決して森林の價値を大ならしむるものではない、宜しく奮勵一番大規模の計劃を立てゝ、杉なり檜なりの良材を植ゑ付け、國產として天下に雄飛するの決心でやらねばならぬ、是は如何しても會津全體、殊に此の地方の資本家有志家の熟考を乞はねばならぬ所である、又鑛床の如きも前途甚だ有望と稱せられて、現に採堀區數十三（此の坪數、百三十九萬餘坪）試堀地數二十二（此の坪數、千二百三萬坪餘）の多きに達し、銅坑が主で金銀坑も多くある、更に實地に調査しかならば、驚くべき多

木曾山林との比較

大規模の森林經營を要す

豐富なる鑛床

數に上るだらうといふことである、併し乍ら何分交通不便の障害物の爲めに奈何ともすべからざる有樣である、此の富庫を開いて將來の開發を期せんには、先づ多年の希望たる野岩鐵道の開通によつて、交通の便を開いた後ちであらねばならぬ。

田島町
鴫山城址
陣屋
田出宇賀神社・藥師寺

田島町　郡の東部に位して若松市を距ること南方十二里　大川の上流荒海川に沿ひ、下野國今市に至る南山街道の要路に當り南會津郡治の地である、人口四千餘もと長沼氏（結城氏の支族）の居城の地で、その鴫山城址は南の方愛宕山麓にあつて今猶隍及び門跡の石垣がある、德川時代には天領として陣屋（此の陣屋は、若松城主の預りであるか實は會津の領地と同じものである）のあつた土地である、社寺には田出宇賀神社・藥師寺などが有名で、金融機關には田島銀行（資本金十萬圓）がある、物産には欅盆目の丸盆・橡瘤の挽物細工孰れも珍である、旅館には瀧本・奈良屋・湯田などがある。

塔の岪　一體大川といふは、其の源を栃木縣の境上荒貝山に發して荒貝川（又荒海川に作る）といひ、若松から田島・山王峠を經て下野國今市に至る南山街道に沿ひて北流し、田島に於て檜澤川を合せて大川となるのである、其の沿岸到る處急流激湍に富み、或は深淵を湛え、人をして俯瞰するだに恐れしむるばかりであるが、其の中にも田島の北方四里二川村の內白岩村にある塔の岪に至つては實に奇觀中の奇觀と稱すべきである、仰げば巨巖層々疊起し、高きものは十五六丈、卑きものも尙十二三丈を下らず、昔は河水此の高所を流れたものと見え、孰れも水流の浸蝕によつて、肉を削ぎ骨を殘して段々層々相重り、恰も九重塔を見るが如き形狀をなして居る、其の下絕壁の所躑躅・紫藤多く、傍一大巖の腰に空嵌の所あつて虛空藏を安置してある、而して此等の巖々にはそれ〴〵名稱があるけれども略しておく、俯せば川瀨は早けれども深くして水靑く、魚淵と稱

湯野上温泉

地獄穴

大内

高倉神社

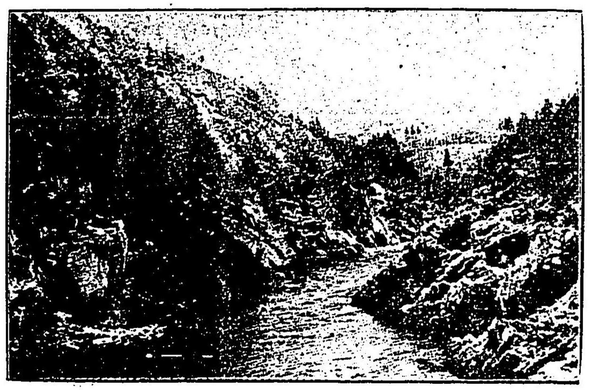
尾瀬沼

して河水洄流する所、巖決れて淵となり、藍を湛へて龍と栖むべく、眞に奇景を極めてゐる、惜いかな僻遠の一小寒村であるので人の之を知るもの稀なるは遺憾に堪へぬことである、その北方湯野上村には大川の兩岸に潜んで湯野上温泉があつて、姥湯猿湯館の湯館新湯等がある、宿舍の體裁整はざるは惜むべきである、村南五町山の腰に一間計りの穴があつて里俗之を地獄穴と稱してゐる、近時蠶種貯藏の風穴となさんとの計畫があるといふ、寔に廢物利用の一法といふべしである。

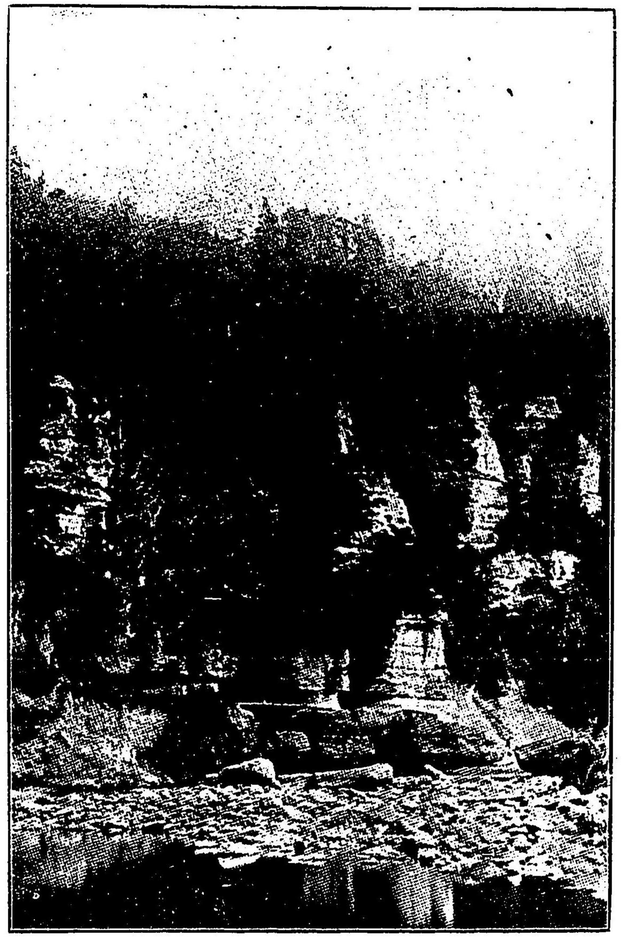
大内　田島の北方豐成から田島街道に分れて左の方に入り、北すること三里餘の處の大内村には、治承四年の旗上げを以て有名なる高倉宮以仁王の遺跡と稱するものがある、又その近傍には高倉神社といふがあつて以仁王を祀つて居るが、是は固より信じ難い。

尾瀬沼　會津の南西隅群馬縣の境上に横はり只見川の水源をなすも

南會津郡長江村橋坂橋及北戸廐



河沼郡群岡村阿賀川と銚子の口(トリ)瀧



二川村白岩地内塔之弟

高山植物に富む

尾瀬平

ので、周圍三里水面の標高實に四千五百尺、故に屋上建瓴の勢があつて、西に決潰する所直下二十丈の大飛瀧となり、三條瀧と稱して只見川の水源である、今此の地方は檜枝岐村に屬しておつて、地盤廣漠殆んど十里餘方に亘り、四方三里の嶮隘を越えるにあらざれば隣村にすら赴くを得ぬ所である、されば此の沼の如きも夏は避暑によろしく、冬は氷滑りに最も妙であるけれども、僅かに少數の漁人の外は殆んど之を訪ふものがない有樣である、然し高山性の植物の豐富なるを以て、植物學者間には既に知られておるのである、これから一里上州の方に下れば周圍十五里の尾瀬平に出る、牧場として極めて適當であるが、何がさて不便を極めて居るので之を利用する時代は何年の後か一寸見境がつかぬ、此の高原の避暑地としての價値は信州輕井澤などの遠く及ぶ所でないとは實見者の公平なる批判である、土人の說には高倉宮に供奉して來たる小瀨大納

駒ヶ嶽
燧ヶ嶽
白峰銀山

言頼國卿の居所であつたといふ傳へて、水田の形も存し、又沼の北岸には小瀬殿的場の跡と稱する所もある、此の地方はかゝる山地であるから、從つて高山も多く駒ヶ岳（六千八百三十尺）・燧ヶ嶽（六千八百十尺）は尾州沼の北方に並んで立つてゐる、中にも前者は福島縣第一の高峯で、且つ高山植物で有名である、而して槍技岐村の西方六里白峰（しらね）銀山は寛永年中から銀坑を開き、元祿二年には土木業者として有名なる河村瑞軒が幕府の命を奉じて開坑して、盛に銀を産出し、後ち寶永の頃には既に廢坑に歸した、然し近時再び採鑛の企てあるといふことである。

伊南
久川城址
照國寺
鹽井

伊南　尾瀬峠から槍技岐を經て北する沼田街道（上野國）の沿道にある村で、その伊南の久川城址は世々河原田氏の居城として有名なもので、墟址今猶歷然として存して居る、古町といふ所の照國寺は此の地方有名なる古刹である、更に北して伊北村に來ると鹽澤といふ所に鹽井がある、

南會津郡は未成品
鐵道の布設を待つのみ

鹽澤川の東岸に滾々として涌出する水を汲みて現に鹽を製してゐる、もとは村民共同して自家用の製鹽に從事してゐたが、專賣法の實施以來仙臺鹽務局の管理となつた、年額百八十石其の質極めて良好である、此の山の中に製鹽場があるとは思ひもよらぬことである。

總じて南會津郡は土地は廣く山多く未だ世に知られざる遺利は多々あること已に疑を容れぬ所である、而して此れが開發は、實に交通機關特に鐵道の便を開いた後ちであらねばならぬ、今の處は全くの未成品として世の事業家を待つの有樣である、唯若松から田島を經て山王峠に至り、更に下野今市に於て日光線と合する計劃である所の東北中央線の布設は將來最も有望なものであらう。

植物採集案内

我が會津の土地が各種の植物に豐富で又珍草の多いとは、早くから專門家には知られて居つたのであるが、公に發表せられたのは、明治三十六年に理學博士早田文藏氏が植物雜誌に南會津郡の尾瀨平と、會津各山の植物目錄を紹介せられたのが始めである、其の後四十年に福島縣の植物目錄として、飯柴永吉氏が紹介せられたとがあるが、何れも交通不便の爲め、採集家諸氏も思ひながら等閑にして顧みる者も少なかつた。然し今日は交通の便も益々よくなつたのであるから、此等の目錄と實際採集した所とを參考して、採集の價値ある多くの植物を紹介して、採集家及び學生諸氏の期待心を滿足することも勉ち無益なことでなからうと思ふ、尙便宜の爲め一々簡單なる說明を附けたが二所以上に亘るものは其

說明を最初の一回に止むることにした、但形狀色彩等の詳細を知らんとする人は、日本高山植物圖譜、及び新編植物圖說を參照するがよからう。

尾瀨沼附近

尾瀨沼は南會津郡の南端卽ち岩代・上野兩國の境にある、此湖畔に生ずる植物には未だ北海道以外に發見せられざる珍奇のものも少なくない極めて好採集地である、道は若松市より田島町を經て檜枝岐より行くも、又群馬縣前橋より澁川・沼田町を經て行くもよい、要するに、尾瀨沼附近は森林帶であるから、道路旅宿の困難に堪へる丈けの決心を要する、然しながら植物分布上早くから專門學者間には知られて居つたのである。

蘭科　うちようらん　本邦中部南部の谿木帶、花候七月、多年生草本。

はくさんちどり　中部北部の草木帶、灌木帶、花候八月、多年生草本。

こけいらん（さゝひね）　中部高山深谷、花らんに類す。

毛茛科　みやまきんぽうげ　中部北部の草木帶、花候八月、多年生草本。

きんばいさう　中部の灌木帶或は草木帶、花候八月、多年生草本　花瓣雄蕊より長し。

しなのきんばい　中部北部の草本帶、花候七月、多年生草本、花瓣雄蕊より長からず。

茅膏菜科　ながばのもうせんごけ　中部北部高山の濕原、花候八月、多年生草本、稀有植物である、嘗て千島に發見せられたるもので、根本莞爾氏之を尾瀬平に得られ、牧野氏これに命名して公にせられた。

菫菜科　きばのこまのつめ　中部北部の草本帶、濕木帶、花候八月、多年生草本。

いはあかばな　山地の濕地、莖高二三尺、多年生草本。

たちつぼすみれ　山野に自生、莖地上匍匐、多年生草本。

石南科　ひめしゃくなげ（にっこうしゃくなげ）　中部高山の濕原、花候七月、常綠小灌木。

つるこけもも　中部北部山中の濕原、花候七月、常綠灌木。

櫻草科　やなぎとらのを　中部高山の濕原、花候七月、多年生草本、北部にありては平原の濕地に生ず。

おほさくらさう　中部北部の草本帶、花候八月、草本。

龍膽科　こみやまりんどう（たこやまりんどう）　中部草本帶或は高山上の濕原、花候七月、二年生草本。

みづかしは　中部北部草本帶、花候六月、多年生草本。

いはいてふ　中部草本帶、花候八月、多年生草本。

山菜莫科　ごぜんたちばな　北地高山、莖高三五寸、花檳圓にして尖る、四葩の苞あつて內に十數短梗をぬき細花をつく。

幌向草科　えぞせきしょう（ほるびいさう）　中部北部山中の濕原、花候六月、多年生草本、稀品。

桔梗科　たにぎきやう　深山淺谷の濕地、花候八月、小草本。

玄參科　みそほおづき　田間池溝の邊、莖高五六寸、二强雄蕋、草本。

百合科　ぎようじゃにんにく　北部高山草本帶、一莖二葉をつく、花候七月、多年生草本。

つばめおもと　中部北部喬木帶、花候六月、多年生草本。

こばいけい（ししのはばき）　山地莖高二尺位、多年生草本。

石松科　やちすぎらん　中部山原濕地、北部にては平地、多年生草本。

こづまとりさう

駒ケ嶽

南會津郡にあつて、標高六千八百三十尺、桧枝岐より登れば約半日に往復することが出來る、植物を採集するには甚だしい困難を感じない。

石竹科　ふしぐろせんのう　諸山の喬木帶、莖の高さ一二尺、花候八月、多年生草本。

ふしぐろ　山野に自生す、莖の高さ一二尺、花は白色微紅色を帶び殆んど莖中にかくる、草本。

毛茛科　るいやうしょうま　花候五月、「さらしなしょうま」に似て、花後葉果を結ぶ。

やまおだまき　中部南部の喬木帶、花候七月、多年生草本、花は「おだまき」に似て黄色を帶ぶ、日光戰場原近傍にも多く自生す。

せりばわうれん　中部の喬木帶、花候四月、多年生草本。

しらねあふひ　中部北部の喬木帶、多年生草本。

虎耳草科　うめばちさう　全國の草本帶又は丘阜、花候八九十月、多年生草本。

薔薇科　しもつけ　山地に自生す、高さ四五尺、落葉灌木。

ちんくるま

繖形科　ほそばのせんとうさう（みやませんとうさう）　北部中部の草本帶、花候七月。

ごぜんたちばな

ちしまにんじん

石南科 つがざくら　中部北部及び南部の喬木帶、花候八月、多年生草本、高さ約二尺内外、山麓に多し。

つるこけもも

ねもとしゃくなげ

なんきんこざくら

龍膽科 みやまりんどう

おやまりんどう

唇形科 じゃこうさう　中部北部の喬木帶、花候八月、多年生草本。

らしょうもんかづら　山麓原野に生ず、高さ一二尺、莖梢に四五莖をつく、毎二莖花を着け、毎莖二花を着く。

くろばなひきおこし　中部北部の喬木帶、花候八月、多年生草本。

いぶきじゃこうさう

みやまこごめぐさ　中部北部の山地、花候七月、多年生草本。

桔梗科 つりがねにんじん　山野に自生す、高さ三四尺、花は青紫色又は白色、圓錐花序、多年生草本。

してしゃじん　山野に自生す、高さ二三尺、花は紫又は白色、總狀花序、多年生草本。

敗醤科 きんれいくわ　中部北部の喬木帶、花候七八月、多年生草本。

菊科 やまはは　邦内を通じて生す、喬木帶より草本帶に及び、花候八月、多年生草本。

ごまな　山地、花は白色頭狀花序、多年生草本。

うすゆきさう　高山に自生す、高さ凡一尺、多年生草本。

磐梯山

耶麻郡にありて、標高六千四百八十一尺、猪苗代町より押立を經て、磐梯温泉に至る道が採集には便利である。

蘭科　はくさんちどり

石南科　あかもの（いははぜ）　中部南部又北部の潅木帶、草本帶、花候七月、常綠綾小潅木、果實赤し。

しろもの

こけもも　中部北部の潅木帶、草本帶、花候七月、常綠小潅木。

忍冬科　ひうたんぼく（まんぎんぼく）　花冠は始め白、後ち黃に變ずるを特徴とす、果實の形瓢簞に類す、落葉樹。

菊科　かせんさう　中部北部南部の山原に多し、花候八月、多年生植物。

うすゆきさう

櫻草科　つまとりさう　中部及び北部の草本帶、潅木帶、花候八月、多年生草本。

虎蹄草科　まるばいちやくさう　中部及び北部の草本帶、潅木帶、花候八月、多年生草本。

柳葉菜科　やなぎらん

小藥科　さんかさう　中部北部の喬木帶、花候六月、多年生草本、果實は菫色を帶ぶ。

繖形科　みんまさいこ　大繖蕚一片、一繖蕚五葉共狹細、花五瓣。

いぶきぼうふう　高さ二尺、花秋、重繖花、葉細小毛なく剛く深綠色。

ほたるさう（まるばさいこ）　白山所產の柴胡と同じく莖を抱く、大小繖共に蕚あり。

じやく　山間濕地、高二尺、花三四月、重繖花白色、葉剪細淡綠毛非なし。

百合科　すかしゆり

吾妻山

岩代羽前の境上にあつて數峰より成る、家形山は標高五千六百八十九尺、一切經山は六千三百三十三尺、小富士は五千八百三十四尺、東吾妻は六千五百十一尺、西吾妻は六千二百四十四尺ある、採集の目的を以て登山

するには、喜多方町より大鹽村に出て、更に松原に至り西吾妻、吾妻富士に登る道順最も好都合である。又日本鐵道線の福島市より庭坂驛に至り、高湯温泉に一泊し翌日小富士に登り、東吾妻を經て一切經に登り、家形山の麓を過ぎて高湯に歸つても宜しい、又別に猪苗代方面の土湯峠の方面から登る事も出來る。

禾本科　きつねがや　山地に自生す、莖高二尺許、莖葉柔軟なる毛を生ず、花候七月、長芒を有する細き穗花を疎綴す。

おほあぶらすすき

莎草科　さどすげ

ほたるゐ　水田沼地に生ず、葉は退化して根逸に其痕跡を止む、花候八月、草本。

はりがねすげ

百合科　はうぢやくさう　山林、莖高一尺餘、葉腋より二三枚を分ち頂端葉腋に二三個を綴る。

ばいけいさう　中部北部の喬木帶の溪間陰地、莖高四五尺、花候六七月、花淡黄色、六瓣、多年生草本。

薔薇科　ちんくるま（いはぐるま）　中部北部の草本帶、花候七月、漑木。

こきんばい　中部北部の喬木帶、花候六七月、地下莖細長く横に伸ぶ、多年生草本。

いはしもつけ

槭樹科　こみねかへて　葉五又は七裂帶紅色葉に後れて總狀花序をなし二十餘花の小花を綴る、落葉喬木時に漑木狀。

みねかへて　中部北部の喬木帶、花候六月、落葉喬木、此種は前者に似たれども其花大にして且小數である。

毛茛科　みやまからまつ　中部南部の喬木帶、花候七八月、多年生草本。

みつばわうれん

虎耳草科　おほばしようま（きけんしようま）　小葉三個大形分裂淺し、花候九

月、多年生草本。

たさなししょうま

たまあぢさゐ　山地自生、高四五尺、花牙球狀、落葉灌木。

五加科　はりぶき　深山に生じ莖高四五尺、葉莖刺毛密生、花候七八月、帶紅白色の小花を着く、落葉灌木。

繖形科　しらねにんじん　中部の諸高山草木帶、小花梗十餘花瓣少しく內方に反曲す、草本。

いはせんとうさう

石南科　いはなし　高二三寸乃至五六寸、常綠灌木。

こけもも

つかさくら

いそつゝじ

こめばつがざくら

くろまめのき

うらじろえうらく　中部北部の喬木帶、花候七月、落葉灌木、蕚裂片線形をなす。

みねずわう　中部の草本帶、花候七月、常綠灌木、綾小伏生す。

あかもの

しろもの

敗腐科　はくさんおみなべし　中部以北の高山喬灌兩帶、花候七八月、黃色粟の如き花を擬簇す、多年生草本。

菊科　ふくわうさう　高山喬木帶の陰地、花候八九月、暗紫色の頭狀花を付く、莖は白色の汁を出す、多年生草本。

蘭科　さそちどり

のびねちどり　南部中部の高山陰地、根は指掌狀にして塊狀をなさず、花候五六月淡紅色、多年生草本。

こけいらん

こふたばらん

うちょうらん　中部南部の喬木帶、花候六七月、多年生草本。

石松科　たかねひかげのかづら　中部北部の草本帶、常綠、多年生草本。

あすひかづら　高山、葉扁平短縮密着、苞狀にして地上を匍伏し、處々に成實穗を出す。

まんねんすぎ　邦内を通して生す、喬木帶、多年生草本。

飯豐山

岩代羽前越後の三國に跨り、標高六千二百四尺、岩越鐵道喜多方驛より三里、一ノ戸村に至り、是より山道二里半ほど行けば、愈〻是の山の喬木帶に入るのであるが、山都まで汽車を利用して行くが適當である、早くから植物採集地として知られて、且つ豐富である。

蘭科　さそちどり　中部の草本帶、喬木帶、花候七八月、多年生草本。

みやまちどり　中部の草本帶、花候八月、多年生草本。

はくさんちどり

蓼科　むかごとらのを　中部北部の草本帶、花候八月、多年生草本。

百合科　こおにゆり

くるまゆり　中部北部の灌木帶、花候八月、多年生草本。

ひめさゆり

虎耳草科　あらしぐさ　中部北部の草本帶、花候八月、多年生草本。

つたやくしや　高山喬木帶、灌木帶、花候七月、多年生草本、花白色細紅點あり。

挽手兒科　あかぬまふうろ　中部北部の草本帶又山原に生ず、日光阿闍沼原に多し、花候八月、多年生草本。

薔薇科　みやまだいこんさう　中部の草本帶、花候八月、多年生草本。

べにばないちご　中部北部の灌木帶、花候八月、矮小落葉灌木、一二の小梗に大形鮮紅色五瓣。

ちんくるま

堇菜科　きばのこまのつめ

おほばきすみれ　中部北部の草本帶、喬木帶、花候七八月、多年生草本。

繖形科　せんとうさう（わっれんだまし）　陰地、高さ一尺、花は複繖形花序。

いはうめ　中部北部の高山の草本帶、花候七月、常綠多年生草本。

あをのつがざくら

まつむしさう　草本帶普通に低き山地にも見る、花候九月、多年生草本。

たちからかう

いぶきぜり　高さ二尺計、花候夏秋、重繖花序大繖は無苞、小繖は針狀、五片瓣淡紅色、「みつばぜり」に似て葉の缺刻深し。

はくさんぼうふう　中部北部の草本帶、花候八月、多年生草本。

のちどめ

石南科　あをのつがざくら　中部北部の草本帶、花候八月、常綠灌木。

しろばなのこめつゝじ　中部の喬木帶、花候七月、灌木、葯は小孔を以て開裂す。

みやまほつゝじ

櫻草科　なんきこざくら（りうきゅうこざくら）　中部の草本帶、花候八月、多年生草本。

みちのくこざくら　中部の草本帶、花候六月、多年生草本、二葉綠に不齊の齒あり。

唇形科　いぶきじゃこうさう　中部北部の山地、花候七月、多年生草本。

玄參科　こゞめぐさ　中部北部の山地、花候七八月、一年生草本。

よつばしほがまぎく　中部北部の草本帶、花候八月、多年生草本。

桔梗科　ちしまきさゞう　中部北部の草本帶、花候八月、多年生草本。

むしとりすみれ　中部北部の草本帶、花候七月、多年生草本、肉食植物として有名なるものである、即ち葉は昆虫捕獲のために兩緣反捲し、葉面に密生せる腺毛より酸性の粘液を分泌して虫體を消化するのである、花はよく菫に似ており、本邦産地としては此の山の外赤城山・岩手山等極めて少數に過ぎず。

菊科　**うさぎぎく**　中部北部の草本帶、花候八月、多年生草本、葯は暗色で、日光・白山等にも多し。

みやまこうぞりな　中部北部の草本帶、花候八月、多年生の草本で御岳・白山にもある。

みやまうすゆきさう（ひめうすゆきさう）　中部の草本帶、花候八月、多年生草本。

旅行之注意

順路の撰定　旅行者の目的に依ては會津に入るべき順路を撰定することが尤も必要である、勿論老弱男女の如何にもよることであるけれども、會津に入るべき道は數多あるから、研究者の注意如何によりては、費用と時間との上に大に損益に關係することがある、今一〜研究者の目的如何により取るべき道を說かん

郡山口　最も一般普通的の入口で、岩越鐵道の便を計つて會津に入るべき唯一の道である。

田島口　これは栃木縣即ち日光、鹽原より入るべき縣道であるが、學生美術家・植物採集者等は、一度は是非取るべき適當なる道である、山水の美、珍植物の豐富なることは早くより專門學者間に知られておつた道

てある。

野澤口　これは東の方郡山口と相對する西方の入口で、北越卽ち新潟より入るべき縣道であつて、不日岩越線が全通すれば、益〻便利を極むるを以て、一般旅行者の通路に適してゐる、大體に於て阿賀川の流れに沿ふ道で、風景も亦頗る見事である。

米澤口　これは南の方田島口に相對するもので、北の方山形縣米澤から檜原湖を經て、耶麻郡喜多方町及び鹽川町へ通ずる縣道であるけれども會津第一の檜原峠があるから、强壯なる學生諸君の旅行としては、頗る興味あるけれども婦女子には甚だ困難を感ずるであらう、然し乍ら幽邃なる山間の湖水は、磐梯の白煙をうかべ、落葉道を埋めて緣楓は色彩を調和し、朝に唐錦着たる山巒を眺め、夕には一日の勞を溫泉に浴するも一興たるべく、美術家・植物鑛物研究者に取りては大に有益であらう、

而して一度此の嶮坂難路を歩いておかば、天下の嶮を以て有名なる箱根峠の如きも、易々として恰も坦道を行くが如き思ひあらしむることを嘗て保證するのである。

山　花　野矢常方

みよしのもゝとせ一木の種ならん山をつくしてさくさくらかな

吉野懷古　同

宮どころうつろひはてしみよしのに雲井のさくら猶ぞにほへる

楠公秋別の給に　同

君が爲めぢれどをしへておのれまづあちしに向ふさくら井の里

附錄

若松市より各地に至る里程

○馬車便
×汽車便

北會津郡　飯盛山白虎隊　二十丁　石部櫻　同上
大塚公園　十八丁　一箕八幡宮　同上
愛宕山　二十丁　○御願　二十五丁
○東山溫泉　三十丁
河沼郡○坂下町　三里半　塔寺八幡　四里弱
○柳津盛空藏　六里　野澤町　八里
野澤山の神　十里　柴尻溫泉　五里
耶麻郡×喜多方町　五里　×鹽川町　三里
×猪苗代町　五里　×猪苗代湖　五里

磐梯山　×五里　加納鑛山　七里
熱鹽溫泉　七里　×山郡（是ヨリ飯豐山ニ登ル）七里
日中溫泉　八里　磨梯溫泉　八里
中ノ澤溫泉　八里半　川上溫泉　八里半
押立溫泉　六里　沼尻溫泉　九里半
横向溫泉　十里
大沼郡○高田町　三里　本郷町　一里半
○小谷溫泉　四里　○芦の牧溫泉　同上
五畳敷溫泉　八里　荒湯　同上
上ノ湯　同上　瀧ノ湯　同上
下ノ湯　同上　老澤湯　同上
中ノ湯　同上　新湯　同上

早戸温泉　十一里　玉梨温泉　十三里半
大鹽泉　十七里（足ヨリ一里許ニシテ有名ナル萬歳炭酸水ヲ出ス）
本名湯倉温泉　十四里　八丁温泉　十三里半
沼澤沼　十二里
南會津郡○田島町　十二里　○湯ノ上温泉　七里
切ノ湯　七里　猿ノ湯　七里
新湯　七里　舘ノ湯　七里
大桃温泉　二十六里　宮里温泉　二十三里
湯ノ花温泉　二十三里　小瀬沼　三十四里
駒ケ岳　三十里　燧岳　三十里
○塔のへつり　九里

若松驛起點各地哩數及賃金一覽表

※未成線ナレバ確定セズ但シ一哩壹錢三厘ノ割

驛名	哩程	二等	三等
郡山	38.7	96	64
堀ノ内	34.2	89	57
安子ケ島	31.8	80	53
熱海	29.5	74	49
中山宿	26.7	66	44
山潟	22.1	56	37
磐都	19.8	50	33
川桁	18.3	47	31
猪苗代	16.3	41	27
翁島	13.6	35	23
大寺	8.3	21	14
廣田	2.9	8	5
○若松	……	……	……
鹽川	7.0	18	12
喜多方	10.8	27	18
山都	17.0	45	29
野澤	20.0	—	—*
上野	178.1	3.39	2.26
赤羽	171.9	3.30	2.20

驛名	哩數	二等	三等
大宮	161.5	3.14	2.09
小山	130.2	2.67	1.78
宇都宮	112.3	2.40	1.60
白川	62.4	1.49	96
須賀川	45.9	1.14	76
本宮	47.4	1.19	79
二本松	53.4	1.31	87
福島	67.3	1.58	1.05
白石	88.6	2.00	1.33
岩沼	105.5	2.30	1.53
仙臺	116.5	2.46	1.64
松島	131.4	2.69	1.79
青森	356.2	5.51	3.67
函館	356.2	9.76	4.71
小樽	576.2	10.87	6.78
札幌	595.3	11.17	6.98
旭川	681.6	12.26	7.71
新橋	188.0	3.54	2.36
大森	186.1	3.51	2.34
横濱	198.1	3.89	2.49
神奈川	196.4	3.86	2.47
大磯	220.9	3.98	2.65

驛名	哩數	二等	三等
豐橋	368.6	5.64	3.76
名古屋	413.5	6.11	4.07
京都	508.2	7.11	4.74
四ノ宮	544.2	7.59	4.96
神戸	555.3	7.61	5.07
鎌倉	210.7	3.84	2.56
横須賀	217.7	3.93	2.62
金澤	579.7	7.86	5.24
四日市	439.7	6.36	4.24
奈良	496.8	6.99	4.66
靈坂	519.3	7.22	4.81
高野口	537.7	7.41	4.94
和歌山	561.6	7.67	5.11
伏見	505.7	7.08	4.72
須磨	559.9	7.65	5.10
舞子	564.7	7.73	5.13
姫路	589.4	7.95	5.30
廣島	745.1	9.59	6.39
下關	884.6	11.06	7.37
宇品	748.8	9.63	6.42
門司	884.6	11.06	7.37
小倉	881.9	11.13	7.42
博多	931.2	11.95	7.84
長崎	1048.2	13.18	8.66
熊本	1009.0	12.73	8.36
佐世保	1004.9	12.72	8.35
鹿兒島	1121.8	13.95	9.17

明治四十四年七月廿九日印刷
明治四十四年八月一日發行

會津
定價金五十五錢

編輯兼發行者　花見朔己
名古屋市東區水筒先町四丁目七十五番地

印刷者　龜井忠一
東京市神田區表神保町一番地

印刷所　三省堂印刷部
東京市神田區三崎河岸十二號地

不許複製

發行所　會津研究會
東京市牛込區佐内坂町三十七

發賣所　三省堂書店
東京市神田區表神保町一番地
振替口座一五九七

大賣捌所

若松市下一ノ町　鈴木書店
若松市大町　田中書店
若松市磯通寺町　昇山堂書店
若松市馬場上一ノ町　森書店
福島市中町　西澤支店
福島市大町　大松長藏
福島市大町　高須書店
郡山町中町　虎屋書店
郡山町停車場通　磐岳堂書店
岩代喜多方町　瀬野屋書店

SIMIZUYA HOTEL
WAKAMATSU

器具整頓居室清冷諸事
親切叮寧東北に冠たり

旅館　清水屋
岩代國若松市榮町

營業品

●和洋酒 ●罐詰 ●洋食器 ●醬油 ●飲料水
●洋菓子 ●煉乳 ●食料品 ●煙草 ●化粧品
●陶磁器 ●硝子 ●洋蠟燭 ●食鹽 ●雜貨類

ビール葡萄酒
平野水サイダ
金線印ミルク
森永西洋菓子
金線サイダー
桃太郎ミルク

大特約販賣
一手元

日本生命保險株式會社會津代理店

堺屋 **森川洋酒店**

岩代國若松市七日町
電話第十一番
振替口座東京第一三五八番

當事務所ハ迅速ヲ尊ビ且ツ輕便ニ取扱フ

若松市榮町
辯護士 **三田角藏事務所**
電話二三三番

歐米流行
嶄新裁縫

福島縣若松市大町一之町六番地

佐藤洋服店

電話番號(貳百三拾六)
電信略號(マスヤ)又ハ(マ)
東京振替口座(一四九〇七)

銘酒 末廣醸造元 若松市上大和町 同 新城猪之吉
御用 木杯漆器製造 同 市七日町 同 漆器部 電話二番
御用 金銀木杯漆器販賣 東京市日本橋區新材木町一九 同 東京商店 電話浪花三三二八番
(銘酒末廣大販賣及會津物産賣捌所) 福島縣郡山町 同 本宮支店 同 郡山支店 電話四四番
同 福島縣田村郡三春町山田屋方 同 三春出張所

登錄商標

釀造本酒舗

岩代國
耶麻郡松山郷

佐藤喜十郎

◎明治廿七年九月七日會津聯合共進會貳等賞銀牌ヲ賜ル
◎明治廿八年七月十一日第四回內國勸業博覽會有功賞銅牌ヲ賜ル
◎明治三十二年十一月十五日會津地方聯合物產共進會貳等賞銀牌ヲ賜ル
◎明治卅四年四月四日佛國巴里大博覽會褒狀ヲ賜ル
◎明治卅四年五月十日奧羽六縣聯合共進會貳等賞銀盃ヲ賜ル
◎明治四十一年五月十日第六回奧羽六縣聯合共進會貳等賞銅牌ヲ賜ル

印刷業
和洋紙商

八丸八商店

若松市馬場上一ノ町

佐藤八四郎

電話百二十番
電略（〇八）

合名會社 安田銀行若松支店

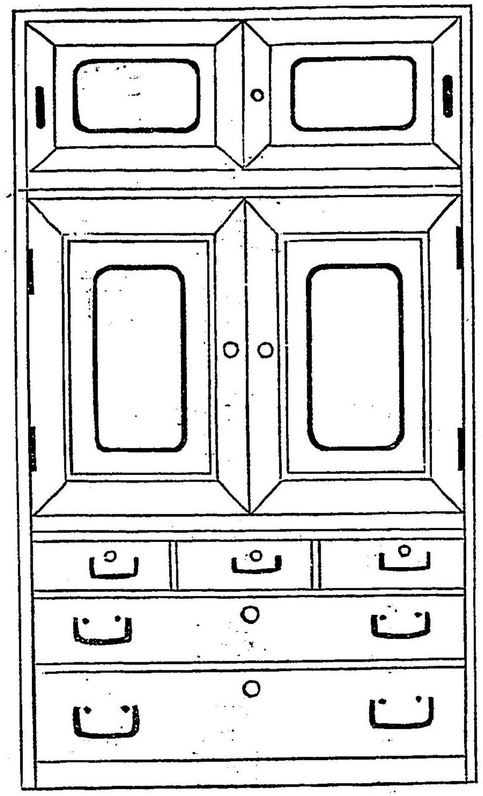
支店長 榎本平七

(長)電話一五番

指物儀式具一式

▲於各共進會品評會▼

▲賜金銀銅賞牌數個▼



福島縣岩代若松市融通寺町

大關和吉

552
126

若松市
賀川産科婦人科醫院
電話百六十一番

本店
營業課目
和洋綿絲綿花
太物卸商
苦松市大町竪丁
電話參壹番

支店
營業課目
味噌醬油釀造鹽元賣捌所
臺灣鹽特約販賣石油卸商
大阪屋號福西伊兵衛

會津之清酒

醸造元 若松大町 相田八四郎

電話長拾番
振替口座東京五〇八二番

東宮殿下御買上之榮を賜ふ

有栖川宮殿下御用 陸軍御用清酒

群馬縣玉成一府 一等賞金牌
十四縣聯合共進會

福島縣玉川郡兵庫
六縣聯合共進會 一等賞金牌

福島縣清酒品評會 一等賞金牌

福島縣若松市
相田八四郎

牛肉問屋
和洋御料理
牛肉卸小賣

春月亭 小林德三郎

岩代國若松市桜町八十七番地
電話長四十二番

若松市融通寺町

内科
肺肋膜病

北内科醫院

電話六〇五番

光澤寫眞
白金寫眞
夜間撮影
ブロマイド引伸
網目銅版・コロタイプ

丸木寫眞館
若松市紺屋町七番地
（七日町北裏通り）
電話二百十番

酒醤油用搾り袋
ぬい目なし丸織袋
白地澁引各種
若松市老町

製造元
林平藏
振替口座東京二三二三番
電話四五九

若松市赤井町五番地

辯護士　外島保佶事務所

電話四四番

吳服太物陳列販賣・石堂倉庫部

明治生命保險株式會社代理店

岩代若松市

石堂吳服店

電話一二六番　電信略號（イシ）又は（イ）

振替貯金口座六二八三番

57-301

日英大博覽會

名譽大賞

受領

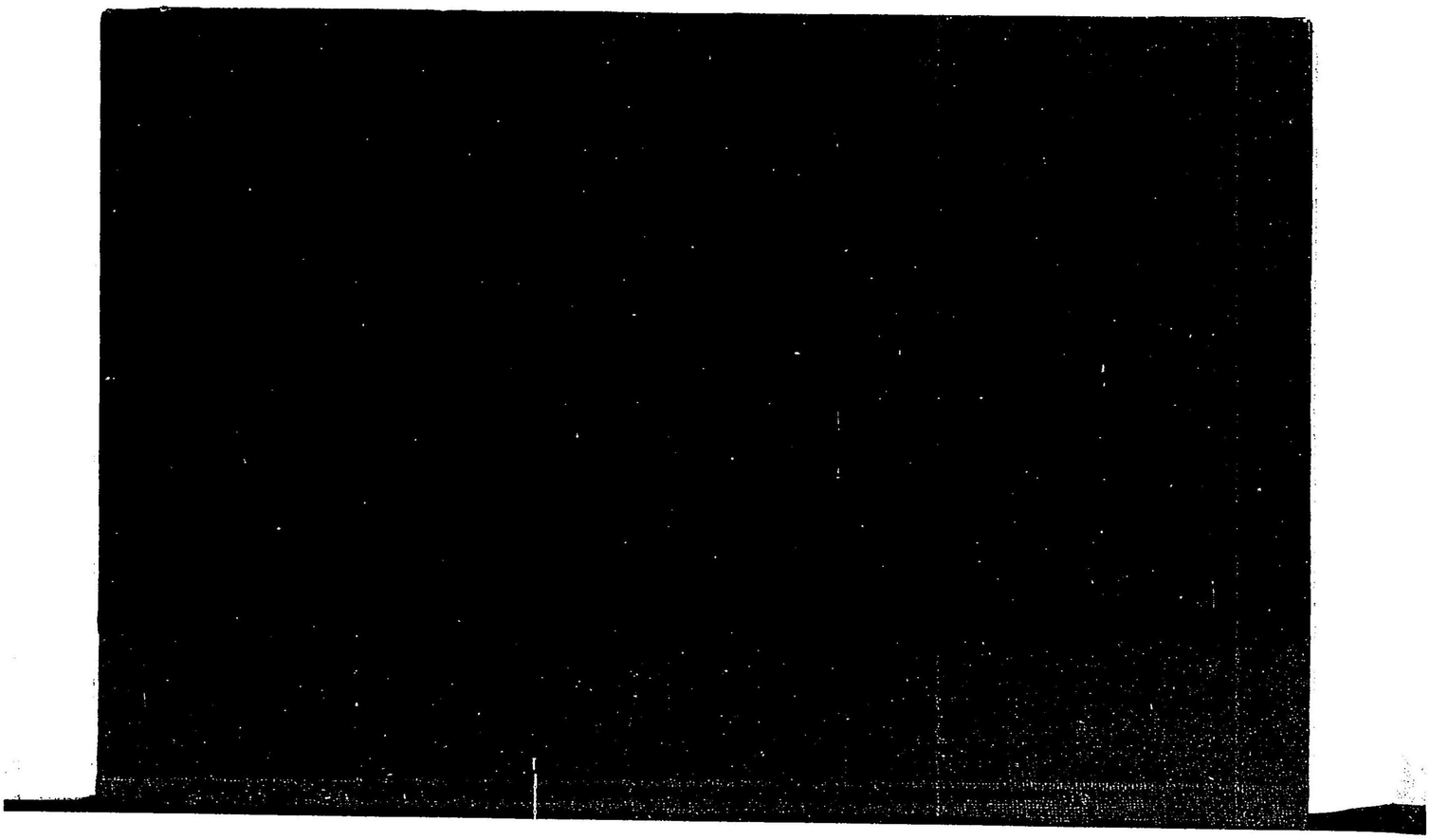
エビスビール

サッポロ

宮内省御用達

大日本麥酒株式會社

63



332
126

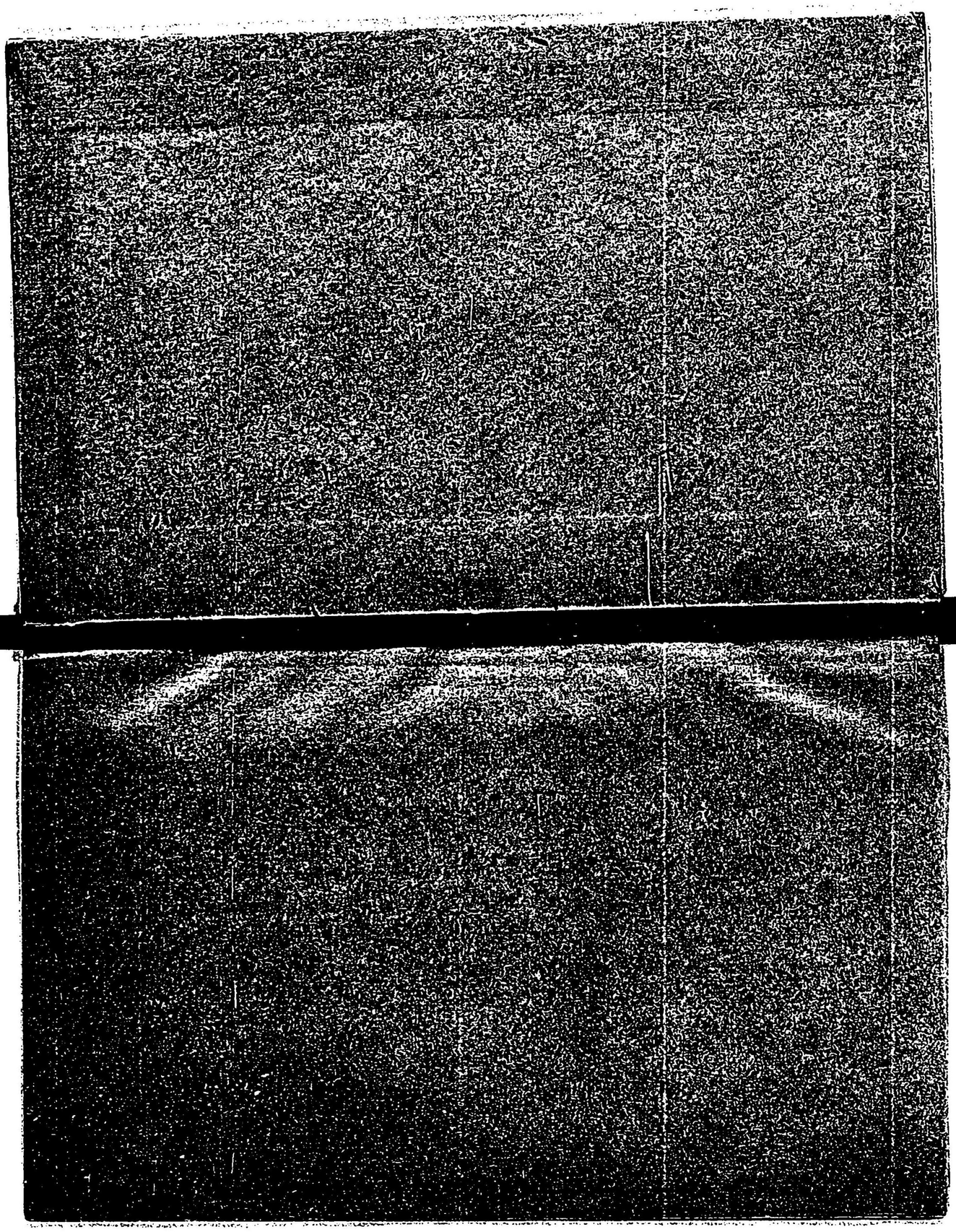
Ⓜ

023296−000−5

332−126

会津

花見　朔己／編

M44

ADC−0170